
斬殺者(ザッパー)

藤巻 彩斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

斬殺者
ザッパー

【Zコード】

Z0374X

【作者名】

藤巻 彩斗

【あらすじ】

人は、とても弱く、脆い存在だ。

知能は高く、運動能力に長けていないとは言わない。弱いのは、その精神、そして寿命だ。

ただ一つの言葉で崩れてしまうような弱く脆い精神。…そして、世界の寿命に比べれば塵にも等しいほどに短い年月しか生きられぬたかが80年と少しの寿命。

人は、世界の『理』^{ルル}には無力だ

だが、世界にはその『理』を超越する、ただ一つの種族が存在する。
その名は『吸血鬼』。

人の生と死を超越した、ただ一つの存在。

それは、実在していた。

0章・出来事と始まり

ザアアア……

ひたすら地面に降り注ぐ雨が、耳元で鳴り止まない音を発し続ける。

コンクリートに当たった雨粒は弾けて消えてしまつものの、その雪は堆積し水溜まりを成してゆく。パツ、と辺りが急に明るくなり、その後に雨音をも打ち消すような爆音が響く。遠くで雷まで鳴っているらしい。

そんな激しい雨風に打たれ、俺の体は冷え切つてしまっていた。

休む暇もなく降り注ぐ雨が俺の服に吸い込まれ、地面に広がるモノと溶け合つて、濁つた染みを残す。

……だが、服に付いた染みは土の茶色をしているわけではなかつた。

燃えるような深紅、血の赤色に染まっていた

俺の腹部から溢れんばかりに流れ出るソレは、雨水によつて溶けだし、量を増してさらに大きな血溜まりを作る。

その血液に含まれたほのかな熱まで流れ出でていくようだ、血を失えば失うほど俺の体温も目に見えて低くなつていてるよつて感じられた。

寒い

傷の深さは恐らく、内蔵まで届いているのだろうか。もしかしたら、食道の一部がはみ出てるかもしない。

傷が大きすぎる上に、雨に血がどんどん流されて行くためか、出血が収まる気配がない。

血を失いすぎた。そのせいか、既に痛みではなく、体の異常な寒さしか感じなくなつていた。助けを呼ばないと……だが、それも無駄だろ？

意識が朦朧として、既に体を動かすこともままならない。

それに、ここは表の道からは見えにくい路地裏の奥だ。仮に声を出せたとしても、そもそも一般人はこんな所を通りたくない。だから、こんな所で人が死にかけていても気付かない人間が大半だろう。

……どのみち、俺は助からないだろ？。……いや……。

俺なんて、助かつたつて仕方がないだろ？

周りから見捨てられ、唯一信頼できるはずの家族にも見捨てられ、もう頼るものなど存在しない俺など……。

周囲からの縁を断ち、一人で生きることを決めた俺など……。

世界が、俺を生かす気が無いなら……もう……いつそ……。

「君は……こんなところで終わっても……いいのか？」

不意に俺の頭上で響いた声。

雨が鳴り響き、人の雜踏の音すら焼き消される中で一際よく響き、尚且つ圧倒的な存在感を持つ、凜として清楚な、女性の声だ。

突然、俺の体に降り注いでいた雨が止んだ。

いや、違う。俺の頭上に傘がさされたのだ。

傘に当たった雨がさらに大きな音をたてる。端から滴り落ちた大粒の雨もまた、地面に当たり大きな音をたてる。

だが、そんな音など耳に入らないほどに、傘を差した彼女の声は、大きな存在感を放っていた。

「もう一度聞こう。……君は、こんなところで終わるつもりか？」

「周りの音は、もう何も聞こえない。」

ただ、彼女の壯麗な声が聞こえるだけ。

ただ、夕闇よりもさらに濃い黒の、彼女の姿が見えるだけ。

ただ、彼女の強い意思が言葉に乗つて伝わってくるだけ

「少年よ。君はまだ生きたいか？」

美しくも猛々しく、凜々しくも優雅なる言葉。

ついさっきまで生きることに絶望していた俺の心は、いつしか彼女の言葉に惹かれていた。

死に捕われていた俺の体が、まだ死ねない、と鼓動を高めているのが分かつた。

彼女が誰なのかは知らない。既に視界もぼやけてしまっていて、その顔も見えない。だが、その言葉の強さに惹かれていた、その声の強さに見とれていた。

俺は……こんなところで

「…………死に…………たく…………な…………い…………」

再び、体中に血が巡る。四肢が熱を帯びていく。

体中の血を失い、既に気を失つてもおかしくは無いほどに弱つていた俺の体は、まだ生きることを諦めずに、死に抗おうとしていた。

…… そうだ。まだ、俺は

「…………生きたいッ…………！」

君の顔も知らない。君のコトも何も知らない。だから……

死ねないんだ。まだ

「 そうか。ならば『えよう、君に』 少女は傘を捨て、ず

ぶ濡れになりながらしゃがみ込む。

穴の空いた俺の腹に手を置き、そつと手をかざし、顔と顔とを近付ける。

彼女の白い指が、俺の肌に触れてくる。

温かいはずのその指は冷たく、今の熱を帯びた俺の体とは対照的だつた。

そして、彼女は言い放った。

「…………生きるための力を『えよつ。…………そり…………』

「『^{ヴァンパイア} 吸血鬼』の、力をな……」

彼女の最後の言葉を聞いた以降の記憶は、今の俺には残つていな
い。

次に目を覚ました時、俺は自宅のベッドの上で寝転んでいた。
あの夜の記憶も、一週間たつた今でははっきりとは思い出せず、露
がかかつたようになつていた。

だが、一つだけ確かな事実があつた。

……俺の腹に残つた巨大な傷痕。……そして、俺の元に届いた一通
の黒い封筒に入った手紙。

この一つが示す、小さな、けどとても大きな事実。……それは……

俺の日常は、今まで通りに平穏ではないといつてことだ。

ザアアア……

「 また、雨か…。そういうや、前も傘忘れたんだっけか……」

「 ハアッ、とため息をつき、人の出が激しい予備校の入口に立ち、再び曇りに曇った曇天を見上げる。

今朝のニュースの天気予報では降水確率0%。それでも気になつて見た携帯の天気予報サイトでも今日は快晴。加えて、今朝の空模様は雲一つ無し。今日は終始晴れ続けるものだと思っていたが……。どうやら、周りの人間もこの雨は予想していなかつたのだろう。携帯で電話して迎えを頼むやつもいれば、鞄を雨避けにして走つて帰るやつもいる。止むまで待つ……なんて考えるやつもいるな。

かという俺も、冷静に周りを観察をしてはいるのだが、正直ビックリして帰るべきなのか悩んでいる所だ。

もちろん、傘・合羽は無し。鞄を雨避けにしようにも、布製なため使つてしまつと中の教科書やノートが使い物にならなくなる。

電話をしようにも、実家は首都圏には無いため、迎えが来ることはありませんだろ。

コンビニで傘を買うという手は……無いことはないが、既に前のコンビニに数十人の予備校生が入り、安物のビニール傘を購入していくのを確認している。もう傘は売切れ、その手段は使えないだろう。

止むまで待つという手も、まるで意味が無いだろうな。さつきから雨は激しくなる一方で待つても意味はなさそうだし、何より、予備校ももうすぐ閉まる時間だ。そんなにこの場所に長時間いられる訳でも無いだろ。

「 ハア……」

「 どしたの、神谷くん、こんな所で突っ立つて？」

一度目ため息に合わせるようにして、俺の背後で少女の声があ

がる。

振り返るまでも無く、その声の主はすぐに特定できた。いつも予備校の授業の際、俺の隣でうるさい女子だ。

「 泽宮^{さわみや}… まだお前も残つてたのか」

明るく可憐な、まるで天使のような 他の塾生が言つていだけなので、俺はそうは思わないが 可愛らしい笑みを浮かべ、俺の後ろに立つ少女。 泽宮^{みすず} 御鈴^{みすず}。

現・私立能美学院高等学校の三年生にして、今年の都立帝都大学の受験生である。

おおよそその童顔や小動物のような背丈からは判断しにくいのが、歴とした18歳で、俺の年齢とは一歳しか離れていない。

日本人には珍しく、深い青色の髪と瞳を持っている。ちなみに髪型はポニーテールで、好きなやつは好きらしく（俺は興味ないけど）。

「奇遇だねえ～！今日は受けた講座が違つたから会えないと思ったんだけど、まさかこんなところで会えるなんて！……雨さんはわしたちの友情に涙して降つてるのかな？」

「それは無いだろ」

「うつ……神谷くん手厳し過ぎるよ……じょーだんなの！」

俺の容赦ないツッコミに対し、胸を抑えてからへなへなと膝を折つて跪く奇妙なリアクションをとる泽宮。これが都会の高校生のあるべき姿なのか…、と少々疑問にも思えるほどに珍妙だ。

…あと、どうでもいいんだが、スカートがめくれかかって、色々教育的によろしく無い気がする。

「…？わたしの顔に何か付いてる？」

「いや、何も

いつの間にかまじまじと見つめていたらしい。

視線の方向を悟られる前に別の方向を見直す。

…幸い、こういったことに鈍感な泽宮はまるで気づいてないよう

だつた。セーフ。

俺が目を逸らした方向には、巨大な電子パネルが設置され、そこでは夜の情報番組が流れていた。

さつきまで雨天時の帰り方や、冴宮のつまらないギャグなど、日常的なことしか考えていなかつた俺だが、そこに流れるニュースの一つを目にした途端、ぬるま湯から引きずり出され、冷水を被つたように気が引き締まつた。

『……昨夜未明、六本木ヒルズ付近の路地裏で、20代前後の男性が腹部を刃物で刺され、意識不明の重態の状態で倒れているのが発見されました。しかし、目撃者が通報し、救急車が現場に着いた時には、その男性の姿は無く、周囲には何も残つていなかつたそうです。警視庁は、被害者の捜索に当たるとともに、この事件が

……』

「……」
「また殺人事件かあ……。最近多いよね、こーゆう物騒なの……」

「……ああ、そうだな」

「……？急にどしたの、なんか暗いよ、神谷くん…？」

「……何でもない。気にするな」

「何でもない」と言つのは、当然のよつに嘘だ。

俺には、この事件について何か思い当たる節…といつより、違和感を感じるのだ。

実を言つと、俺には昨夜の記憶 この事件が起きた時間帯ちょうどの記憶が、すっぽり抜け落ちているのだ。

9時頃までの記憶は残つてゐる。今日と同じよう、予備校に通い詰めて……。

だが、その次に記憶に残つてゐるのは、暖かい快晴の空から降り注ぐ太陽の光を浴びて、自分の部屋で目を覚ましたこと。

……つまりは、予備校から、家に帰るまでの記憶だけが抜け落ちてしまっているのだ。

普通の記憶喪失なら、今までの記憶を全部失つか、軽いものでも一週間近くの記憶は失うはずだった。

それともう一つ引っ掛かるのは、俺の腹に残った大きな傷痕のことだ。

痛みは無いし、もう完治しているのだろうが、俺はこんな大怪我をした記憶がない。

記憶に無い怪我　単純に考えれば、記憶が無いうちにしてしまつたというのが妥当だろう。

この怪我のせいで記憶を失つたといつながら、辻褄が合ひつ。

だが、何故俺はこんなに大きな傷を負うことになった?

確かに、昨日も雨が降つたが傘を忘れたために、走つて帰ろうとはしたが、それで滑つて転んだからといってこんなに大きな傷痕は残らないだろう。

と考えると、昨夜俺が記憶を失つた時間帯、その時起きた事件と俺の記憶喪失とは、何らかの関係があると見て間違いないだろう。

確信は、持てないがな。

「 そういえば、お前はどうやって帰るつもりなんだ?」
「 んにゅ?今日は親が迎えに来てくれるよ。神谷くんは?」
「止むまで待つつもりだよ。傘忘れたし、迎えも来ないからな
「 そーなの?.....それならわたしの傘、貸してあげるよ」
俺の答えを待つことなく、冴宮は花柄の鞄の中身を漁り始める。

今時絶対流行りそうにない柄のハンドバッグだな、と内心失礼なことを考えながらも、傘を貸してくれるというのは有り難い、とも思つてはいる。

……傘の柄については、嫌な予感しかしないが。

「あつた！　はい、これ！　貸すだけだからね！」

「あ、ああ……」

間違つても借りパクだけはしねえよ、と心の中で呟きながらも、ちゃんと傘を受け取る。

傘を開くと、……案の定、少女趣味全開の花柄プリントが広がつていた。

……はずかしすぎるだろ、これ……。

「　迎えも来たし、先に帰るね。また明日～！」

「ああ。またな」

黒の高級そうなセダンの後部座席の窓から手を出してブンブンと振つてくる冴島。

運転手は黒スーツにグラサンを掛けしており、まるで映画に出でくるＳＰのようだ。　といふか、本当にＳＰであつたりする。

何を隠そう冴宮　美鈴は、父に現総理大臣・冴宮　金彦かなひこを持ち、母にかの有名な財閥グループ、一留木財閥会長、冴宮　御来みらいを持つ、正真正銘のお嬢様、ＳＰに守られてもしようがないほどにやん”となき身分の人間なのだ。

当然、命を狙つたり誘拐しようとしたりとかする輩も少なくはないので、普段から護衛としてＳＰがついているらしい。

今日も……ほら。ビルの影から5、6人。黒服の厳ついお兄さんが出てきたよ。

いつもなら多くても2、3人ぐらいのはずなのだが、やはりあの殺人未遂事件を警戒してのことなのだろう。当然といえば当然

だろうな。

影から出でてきた黒服軍団は、全員セダンに乗り込み、冴宮が乗つた車をさっせと追いかけて行ってしまった。

「……」

……座席余つてゐるなら乗せよう、と言ひ暇も無かつた……。

俺こと神谷 遼は、かなりダサい花柄の傘を差し、夜遅くになつてもう誰も通つていらない六本木の街道を進んでいた。

俺が借りているマンションはこの道沿いにある。通り慣れた道だ。六本木ヒルズから出てきたと考えられる人影と時折すれ違うこともあり、その度に感じる視線が痛いとは思つたが、それ以外は何も違和感を感じなかつた。

ただ一つ、俺を見つめ続ける目以外には

「……薄気味悪いな……さつきから……」

どこからかは分からぬ。背後か……それとも横か……前なのかもしない。

ただ感じるのは、視線だけ。

ただ見られるだけなら、こんな冷や汗なんて搔きはしないだらうし、恥ずかしい程度で済むだらう。

……だがこれは、何かを探られているような視線。何か監視されているような視線。

「……くそつ……」

苛立ちは徐々に募つていくだけだった。

結局予備校を発つてから俺のマンションに着くまでの30分間、気味の悪い視線が止む気配はまるで無かった。

時々後ろを振り返つてみたり、「出でこいッ！」と叫んでみたりしたが、視線はずっと俺を見続けているだけ。反応なんて一切無かつた。

：のだが、マンションの玄関までたどり着くと、途端に薄気味悪い視線は消え失せ、激しい悪寒もなくなつてしまつた。

余りにあつさり消えてしまつたので少し拍子抜けしたが、それでも気分はすっきりしたので良かつたと思う。

「…今日は無駄に疲れる日だな」 激しい雨でびしょ濡れになつた傘を軽く振つて水滴を落とし、折り畳んでしまう。

雨でこのダサい花柄も一緒に落ちてくれたら……なんてのは当然のようないのでは、せめて通りかかったご近所さんに俺が悪趣味ではないかと疑われないように、隠すべうはしどきないとな。

さらに気疲れしたような感じがするのは、たぶん氣のせいだらうつな。

自室の番号『506』の郵便受けを開け、自分宛ての手紙が届いていいのか確かめてみる。

すると案の定、ズルズルズルズル…と大量の派手な柄の封筒が流れ落ちてきた。

「またかよ……もう十分だつての、予備校の案内書なんて…」

俺は、実を言つなら浪人生であり、これから一年は志望校合格を目指して猛勉強しなきゃいけない立場である。

だから、すでに高校を卒業している以上、自分で勉強するか、予備校に通うか、家庭教師を雇うかぐらいしか、受験勉強をする方法なんて存在しない。

だから必然的に、いつこうした予備校やらかできょーやらの案内状なんかが大量に送り付けられてくるのだ。

…まったく、いい迷惑だつての。

「……ん？」

だが、いつもは勉強関連の（ある意味）迷惑メールだらけのポストの奥に、ただ一つだけ、異質なオーラを放つ封筒が存在した。

普通は切手、住所、郵便番号なんかが貼り付けてあつたり書いてあつたりしているはずなのに、その封筒には何も書かれておらず、切手も貼られていなかつた。

封筒の色も変だ。普通なら茶色をしたものや白色をしたもののが主流だと叫うのに、それは完全なる黒色をしていた。

そして、その中心にはただ白い文字で…『神谷 遼様へ』…と書かれているだけだつた。

「何だ……これ……？」

どう考へても塾案内の封筒には見えない。

それどころか、まともな郵便の運通を通して届けられたものであるかどうかも定かでは無かつた。

おかしそぎる……。

今、俺の身の回りでは、奇妙なことが起き続けている様な気がする。

昨夜の記憶欠如、帰宅途中感じた視線、…そして、この黒い手紙。

何故か、この三つの出来事は、切つても切れない関係にあるような気がしてならなかつた。

……そして気がついたら……その封筒を、まるで破り捨てる勢いで開けようとしていた。

『どうも、初めまして。……とはいっても、手紙では君は私の顔が分からぬだろう。それに、私たちはお互いに、すでに顔を会わせているのだ。初めましてとは、誤った言い方ではあるな。

突然このような手紙が送られてきて、君はさぞかし驚いているだろう。だが、安心してほしい。私は君の味方だ。……少なくとも、君が私たちの目的の妨げと成らないのならば……の話ではあるがな。

……そろそろ、本題に入るとしよう。

神谷 遼君。私は……、君と直接会って話がしたい。

もちろん、無理にとは言わない。君の意志で私に会おうと思つたなら、下に明記した住所まで、今週の満月の日の午前〇時ちょうどに来てほしい。

……それに、無料^{タダ}でとは言わない。君が知りたい情報、私が知つている限りのことなら、できる限り提供しよう。

……君に、世界の闇に飛び込む勇氣があるなら、君とは再び会つことになるだらうな。

……それでは、また会おう。』

……手紙の最後には、『東京都渋谷区神宮前＊＊＊-＊＊』……と、この手紙の主が待つと思われる場所の住所が記されていた。

「嫌がらせ……じゃないよな……。……何なんだよ……これ……」
手には汗が浮かび上がり、便箋が僅かに濡れてきた。

この手紙が何なのかは、まるで検討もつかない。……だが俺は、

この瞬間に、何かを感じ取っていた。

俺に襲い掛かるであろう、何かを……

2章・会合と吸血鬼

件の手紙に書かれた住所にある建物は、そう簡単に見つかってはくれなかつた。

……まず、渋谷区の喧騒の中で建物をじつへりと見る見ることができなかつた。

無駄に多い夕方の人の波に呑まれ、あつちやこひちやに流されるうちに数十分の時が流れ、結局そこではなかつた……といつのをループのように繰り返していた。

そしてようやく気付いた。黒い手紙を送る様なやつが、表に居を構えているはずが無いといつことに。我ながら気付くのが遅すぎる。

そこからは探し方を変え、裏路地の住居を風漬しに探し回ることにした。

……だが、ここでも面倒なことに、簡単に捜索が出来るわけではなかつた。

……それは、カラーギヤングの存在だ。

決して多い訳でもなく、法律が一層厳しくなる度数を減らしていくの存在ではあるが、その存在が完全に消滅したわけではない。

最近もいくつか顕著な名前のグループは存在するらしく、それらの台頭に伴つて、いくつもの小規模なグループが結成されているらしい。

……そして、『ギャング』と名の付く以上、そいつらも血氣盛んで野蛮な輩が多いのも、また事実だ。

「アーン！？ テメエどこ見てほつき歩いてんだア？」

「いつて～！ 骨折れちまつたア～！？」

「テメエ 慰謝料払えやオラア！！」

： 捜索に入る前からこれだ。

狭い路地なので仕方ないとは言え、道いつぱいに3人そろぞろ広がつて進む若者を避けるというのが無理な話だ。

赤色のバンダナを頭に巻いたゴロソキ達は、俺と肩が触れ合った瞬間「肩の骨が折れた～！」とか喚き出して、急に転げだし、感謝料を求めてきた。当たり屋という奴だろう。

やられてみると分かるが、無理が有りすぎる。明からさまで折れてないのは事実だし、道を広がつて歩いていた向こうが悪い。裁判所に届け出れば勝つのはこちらで間違いは無いだろう。

だが相手の怖いお兄さん方は、俺を快く見逃してくれるような雰囲気では無かつた。

「…なアに黙つてんだゴラア！…？」

近くにあつたポリバケツを思い切り蹴り飛ばし、中身を狭い路地にぶちまける。

…ナマ物が大量に詰め込まれていたらしく、ものすごい悪臭が周囲に立ち込める。

…ヤバイ。

「…」じを早く離れたい、と思つ理由がもう一つ増えちまた。

「…ハア…」

「ンなアにすかしてんだこッ…」

「ドゴッ！」

俺につかみ掛かろうとした男、その体が、凄まじい音と共に吹き飛ぶ。

宙を舞い、重力の奔流に飲み込まれながら落としていく男の体は、まだ倒れていないポリバケツにぶつかり、無惨にもはいつくばつていた。

一瞬、周りの空気が硬直する。

残つた男2人は、驚愕の表情を浮かべたまま、俺と、吹き飛ばされた男とを交互に見合せている。

…対する俺は、いたつて平然でいる。

まあ、当たり前だよな。

今、この男を吹き飛ばすような一撃を叩き込んだのは、…俺なんだし。

腹部を思い切り殴り飛ばされた男は、衝撃がキツかつたのか、それとも打ち所が悪かつたのか、泡をくつて昏倒している。

その死に顔（死んでないけど）を見るなり、他の2人の顔もみる見る青ざめていく。

この時点ですでに残りの2人も腰が引けてしまっている様にしか見えない。これ以上やるのは野暮というものだ。

「…どうしてくれ。…先、急いでんだよ」

コクコクと頷いて道を開けた2人の横を通り抜け、路地の奥を目指す。

後ろで「ヒイイイー！」という断末魔のような叫び声が聞こえてくるが、気にしないほうが身のためだろう。

下手に突っ掛かつて行つて、仲間でも呼ばれたら面倒だし、何より関わるのが面倒だ。

……つたく。

今も昔も……俺を取り巻く環境は変わらないな……ホントに。

最初のヤンキー共を追い払った後は、他のめんどくさいのに絡まれることなく奥に進むことができた。

…まあ、さつきの断末魔みたいな叫び声にビビって出てこられないのかもしれないし、元から誰もいないのかもしれない。どちらにせよ、今の俺にとつては好都合以外のなんでもない。

時刻は11時50分。家を出たのは6時じろだつたはずなのに、目的の場所を探しているうちに6時間も経ってしまった。

あと、10分か...

もうこれ以上、探せる時間は無い。
毛糸の路地に無かつたら、諦めて帰るとしようか……と決めた

瞬間

ん?
これか?

紙に記された住所には、確かに家屋が存在していた。

……いや、『家屋』といふよりも、『廢屋』に近い。

左右に並んだビルは、表参道の建物に比べ少し老朽化

いの配はる。

周りの建物より明らかに老朽化が進んでおり、所々鉄骨が見え隠れしている部分も存在する。

窓は焼け、ヒビが入っているのもあれば、壊れてしまっているものも存在する。

看板もサビ塗れ、穴も空きまくつている。

……どうからどう見ても、誰も住んでないだろ、ハハ。

一応、スマートフォンのGPSで、目的地と現在所在地を照らし合わせてみる。

■
■
■

…GPSも、完璧にこの廃屋を示している…。

拡大縮小、再検索といろいろやっても、何度もこの場所が示さ

れる。

モーニングショーでいう間に、時刻は11時59分。もう迷う時間は

無くなってしまった。

「……はあ……。行くしかねえか？」

意を決して、ホコリに塗れた廃屋に入ることにする。

今夜は満月。辺りを照らしているのは月の光だけである。

……真夜中で良かつた。こんな場所に入つていくところを他人に見られたら、変な噂を立てられかねないからな。

入口のドアは、錆び付いたボロボロの見かけのわりに、押しただけでスッ、と簡単に開いた。鍵はかけられていないらしい。中には月の光が入つてこないらしく、明かりも付いてない中は、数歩先からもう真っ暗で何も見えなかつた。

「う……ごめんください……」

返事は無い。

帰つてくるのは俺の声、その反響音だけだつた。

風の音一つ聞こえないとは……少し怖くなつてきた。

流石にこの歳になつて幽霊の存在を感じているとは言わないが、どうしてもここまで人気が無いと、反射的に怖いと感じてしまう。せめて明かりでも付けようと、電気が通つていかないか確かめるため一步前に進むと

「う……」

パツ、と急に微量の明かりが灯り、部屋を照らした。

誰もいないはずの廃屋で、俺はまだ証明のスイッチに手を触れていないどころか、見つけてすらいなのに勝手に光が灯るなんて……。

確かに、この空間には光が灯つてゐる。

……ただし。……蠅燭の光……だけどな。

青白い不気味な蠅燭の灯が奥まで続き、その後螺旋を描くように

上に続いている。

光が灯っているはずなのにその周りの空間は薄暗く、火が列を成し、道を作っている様にしか見えなかつた。

…不気味だ…。

ガチヤン！－力チツ！

「！？」

突如背後で勢い良く扉が閉じる音、そして鍵が掛かる音が鳴つた。
「ちよつ……おい！－出られねえ！！」

当然のように、扉は押しても引いても微動だにしない。
なら鍵を開ければ良いと思い、内側にあるはずの鍵を探すが…さ
つきまで、扉には鍵が存在していたはずなのに、今その場所を見て
も鍵は存在しなかつた。

…この状況…。

俺……閉じ込められたんじゃ……？

『…よく来たな、少年。…君が来るのを待つていたよ』
扉にかじりついていた俺の背後で、突然声が上がる。

女性の声ではあるのは確実だが、少し低めの落ち着いたトーンな
で、幼げな少女の雰囲気は感じられない。

…と、言つよりも…俺は、この声をどこかで…聞いたことが
ある気がする…。

声のした方向を振り返つて見ても、誰もいない。
声も直接聞こえたわけでは無く、反響音の様になつていて、
そこにはいなくてもおかしくは無い。
だとしたら…どこから…？

『私はここにはいない。別の所から話しているのだよ』
まるで俺の心を読んだかのように、すかさず補足が入つた。
ここにはいない…ということになると、やはりスピーカーか何か
使って音声を別の場所から発しているのだろう。
…いくら古い建物とはいえ、それくらいの機材は揃つているだろ
う。

「あんたは誰なんだ？…俺に何の用なんだ？」

この場所にいるでもない相手から返事が返ってくるとも思えなかつたが、意外にも答えはあっさり返ってきた。

『それを知りたければ、私の元に来るといい。その道をたどればすぐだ。…待つているぞ』

「おいつ、待て！俺の質問に答えるつーー！」

…だが、その問いに答える声は無く、再び静寂が戻ってきた。やはり真実を聞き出すには、この声の主に直接会うしかないらしい。

「…行くしかねえか…」

声が答えた『道』なるものは、恐らくこの蠅燭に挟まれた廊下を指すのだろう。

青白い蠅燭の灯は不気味でしようがない。

せつかくの決心が緩みそうになつたが、それでも俺は、前に進むしかない。

…もうここまで来たら、引き返せそうにもないけどな。

「…それにしても……」

玄関から見えていた通路を通り抜け、階段の中腹辺りまで来た頃に、ふと呟く。

蠅燭の道を通りて、またもや不可思議な事実に気付いてしまつたのだ。…この蠅燭、宙に浮いてないか…？

遠目から見ると、台か何かに乗っているものではないかと思えるのだが、どうやらそうではないらしく、蠅燭の付いた台座が宙吊りの様になつてているらしいのだ。

…だが、宙吊りにしているはずの糸も見えない。

普通なら光に照らされて、多少の糸の影は見えるはずなのだが、その反射光すら見えてこない。

…どうこう原理で浮いているのだろうか？
あの手紙の主に会つたら聞いておこうか。

そういひしていふうちに階段も終わり、いつの間にか蠅燭の列も無くなつていた。

そして道の先には、ゴシック調の紋様が彫られた扉があつた。ビルの外觀に相応しくないほどに華美な裝飾が施されており、周りのどんな風景よりも目が引かれる。

異様なまでの存在感を放つその扉に手をかけ、押し開ける。
ガチャッ…と、その見た目や大きさからは想像できないほどに軽く、あつさりと開いた。

まるで、俺を招き入れるかの様に

不意に、俺に少しのためらいが生じる。

このまま行つて、果して無事に帰れるのだろうか？
このまま行つて

俺は、人間のままでいられるのだろうか…？

何故そう思つたのかは分からぬ。

俺の直感が…俺の勘がそう囁いているよつと思えた。

…だが、もう後戻りはできない。

ここまで來た以上、俺も眞実を知るべきのよつな気がした。
俺は決心して、目の前の扉を押し開けた。

…この選択が、自分の運命を大きく変えることになるとも知らずに……。

「……誰もいないな……」

正面の扉をくぐると、そこには洋風な居間が広がっていた。扉の外装同様に、ゴシック調の家具、カーテン、壁紙……ありとあらゆるものに同じ装飾が施されている。

カーテンに覆われた窓にはホコリが積もっている様子もなく、清潔感が漂っている。

上に吊されたシャンデリアもこれまた華美な装飾が施されており、ダークな雰囲気を醸し出している。

…。

「これ……ホントに廃ビルの中か…………？」 「もちろんだとも。」 外からだと、分かりにくいだろうけどね

「つおつ！？」 誰もいなかつたはずの空間に、突如声が響く。 …デジヤヴュとしか思えない状況だが、いきなり声をかけられると驚くものだと、改めて認識させられる。

声の方向……奥の扉の方を見ると、一人の少女が立っていた。 雪の如く白く艶やかな、腰まで伸びた美しいロングストレートヘア。

秋葉原でよく見かける、所謂『可愛いだけ』のゴスロリではなく、中世ヨーロッパの女性が着ていたような、不気味さ漂う『本物』のゴシック・ロリータのドレス。

現代の人間にはありえないほどに瑞々しく、透き通った白い肌。 …そして、その端整な顔立ちからくる、常人離れした美貌。 どれをとっても、俺が今まで見た人間の中で最も美しいと素直に

思えた。

いや、それだけじゃない……。

俺が彼女に目を奪われるのは、それだけが理由の全てじゃない。

もしかしたら……俺は……。

彼女に会つたことが……あるのか……？

少女は軽く首を傾げる仕種をしてから、少し申し訳なさそうに言葉を口にした。

「すまない。驚かせてしまったようだね」

女言葉を一切使わない偉そうな人の、見方を変えると、相手を下に見るような口調なのだが、不思議と嫌みな感じはしない。話し手と雰囲気がぴったり合つ言葉と言うものは、いつも聞こえが良いのだろうか？

「…そろそろ、俺の質問に答えてもらひたい。…あんたは何者なんだ？ポストにこの黒い手紙を突っ込んでまで、俺に何の用があるんだ？」

ジーンズのポケットから黒い手紙を抜き取り、少女の前に見せつける。

少女はその黒い手紙を見ると、再び笑みを浮かべる。

妖艶な、だが落ち着きと分別のあるような笑みは、その幼げな見た目とは相反したものであった。

つかつかと歩みより、漆黒の皮張りのソファに座り、こちらをひたと見据えてくる。

その紅の眼は、見続けていると、何時しか魂を抜かれてしまいそうなほどに美しく、澄んでいた。「…まあ、立ち話もなんだ、そこに腰掛けるといい。…話は長くなるだろうからな」俺はその言葉に甘えることにしてソファに、少女の目の前の席に、遠慮せず座ることにした。

満足そうな笑みを浮かべた少女は、更にソファに深く座り、足を

組む。

「… そうだな。何から話せばいいのか分からぬが… まずは自己紹介からいこうか…。と、その前に… 鏡士郎、茶を淹れてくれ」少女は、奥のキッチンと思われる場所に声をかける。
まだ人がいたのか、と思いながらそちらの方を見る。

奥から現れたのは、美しい金色のセミロングヘアをたなびかせ、黒いスーツに身を包んだ男性だった。

年齢は…二十代後半…といつたぐらいか? 少女同様、その身に纏う雰囲気の異質さのせいで、見かけから年齢を判断するのが難しい。黒色のフレームレスの眼鏡をかけてはいるが、それで隠れているにも関わらず、はつきりと分かるほどにパーツの形が良く、美青年と呼ぶに相応しい顔立ちをしている。

『鏡士郎』、と呼ばれてはいるが、髪は金色、瞳は青色なので、どちらかと言えば歐州出身のような気がする。…髪は染めてあり、カラーコンタクトをしているなら話は別だが。

「… はい、只今。… お客様は紅茶になさいますか? それともコーヒーになさいますか?」

「…えっと…じゃあ、コーヒーで」

「畏まりました。…暫しお待ちください」

執事は軽くお辞儀をすると、くるりと燕尾服を翻しながら一転して、再びキッチン（英國風に言えば厨房）の方へと戻つていった。
「彼は菊岡 鏡士郎。私の執事だ」

少女はそう、あっさりと言つてのけた。

あまり意識せずに話しているように見えるのだが…現代で従者取り分け専属の執事なんてものは、日本でも相当の金持ちにしか雇えるものじやない。

この部屋の家具の高級感からも窺えるが、この女、どこかの大富豪の娘か何かなんじやないか…?

「…私の名はシルヴィア。シルヴィア＝ヴラード＝ドラケリアだ」

少女は気品のある口調でそう告げる。

始めて聞く名前、……だがどこかで聞いたことのある名前だ。

……ドラケリア、……ドラケラ、……ドラキュラ、……。

……いや、『どこかで聞いたことがある』じゃない。『誰でも一度は聞いたことのある』名前、だ。

「……中世以降のルーマニア独立の礎を築き上げた『ドラキュラ公』の異名を持つルーマニアの英雄にして、ブラム＝ストーカーの小説『ドラキュラ』の吸血鬼、ドラキュラ伯爵のモデルとなつた人物、ワラキア公フランツ＝ドラケリア三世……その子孫つてことか」

「ほう……よく知っているな」

「……一応、帝大の受験生だからな」

「……ドラキュラ伯爵と言えば、吸血鬼語るには欠かせない要素の一つでもある。

まあ、一般人ではそれくらい知つていればいい方だ。受験生としては、そういうことの詳細も知つておかぬきやならないのだが……まさかこんなところでその成果が出るとはな。

「……で、そのドラキュラ伯爵の子孫が、一体俺に何の様だ?」

「それは

「お嬢様。お飲みものをお持ちしました」

質問の答えが返つてくる前に、ざつやうお茶を淹れた執事が戻つて来たらしい。

……てか、空氣読めなさすぎだろ、あんた。

……ホラ、あんたのお嬢様も、思つつき固まつちまつしてゐるぞ。

……まあ、俺には関係ないけど……。

「……ふむ……ストレートティーに、この深い苦みと甘い香り……今日は、ダージリンの茶葉を使っているな？」

「……よく分かりましたね、お嬢様。……はい、今日の茶葉はダージリンの夏摘みを短時間抽出したもの……それをストレートに淹れたものでござります」

「……やはり、お前の淹れた茶は美味しいな……」

「勿体無きお言葉……」

硬直状態にあつたシルヴィアは、…………だージリン？…………せかんどうふらつしゅ？…………とか言つ紅茶を飲んだ途端に、元の饒舌モードに戻った。

……紅茶の種類の知識なんて受験には必要無いからといってナメすぎた。紅茶とコーヒーの違いを、透明か透明じゃないかの違いで判断していた俺にとっては、このお嬢様と執事の会話は、もはや宇宙人語に等しかつた。

……てか俺のコーヒー、確実にインスタントだろ。普通に喫茶店で飲むやつよりマズイし、台所に詰め替え用の袋が見えてるぞ。

「……さて……ではそろそろ、話の続きを」とこづか

手に持つた紅茶のカップを下のソーサーに力チャリ、と置き、紅茶から目を離してこちらを再び見据える。

俺も自然とコーヒーの入つたカップを手から離し、シルヴィアの方へと向き直る。

少しだけ、場の雰囲気が変わる。

……そして、次の彼女の言葉は、俺の想像を遥かに超えた、不可思議な言葉だった……。

「……君は、吸血鬼ヴァンパイアの存在信じているか？」

「……は？」

会話開始から約1秒、早速話が脱線した様に思えた。

……『吸血鬼』とは、この世に蔓延る伝承、寓話、物語の中だけの話、その中の登場人物の一人に過ぎない、人が生み出した『偶像』の產物だ。

人の想像が生み出した存在は、あくまで想像の中だけの存在。……だが、この女は、『それ』を信じているか、と問うてきた。

……新手の宗教の勧誘か……？

「用がそれだけなら、俺は帰るぞ。受験生は暇じゃないんだ」

「待ちたまえ、神谷君。まだ話は終わっていないぞ？」

俺が席を立とうとするのを制止するように、シルヴィアは話しかけてくる。

だが、俺には既に、ここにいるべき理由と言つものが消え失せていた。

「冗談じやない！お前らのおふざけに付き合つてている暇は無いんだ！宗教勧誘なら別のやつに……！」

「座れ、と言つている」

その瞬間、大気が揺れた。

圧倒的な威圧感、押し潰されるような感覚、……いや、それ以上に……。

純粹なる、『恐怖』

……今まで、これほどまでに『怖い』と思つたことがあつただろうか？

補色獣に睨まれた獲物……とでも言つべきなのだろうか。冷や汗が滝のように流れ落ちてくる。

やがて俺は、一つの答えにたどり着いた。

この女に、逆らってはいけない と。

「 君は…吸血鬼の存在を信じていなにようだね?」

シルヴィアはソファから立ち上がり、ゆっくりと歩み始める。軽やかな一步一歩、その全てが、俺にとつては巨人の一歩に等しく感じる。

そして彼女は、俺の背後で立ち止まる。

「なら、教えてあげよう。吸血鬼の存在、その真偽を 」

ドスッ……！

「 これが…、眞実だよ。神谷 遼君」

3章・変化と眞実

突然つき立てられた、漆黒に煌めく短刃。

先端は細く尖っており、『切る』と言つよつは『差す』ことに特化した形状をしている。

そんな細身の刃に対して、鍔は横に広く、腕を守る様に造られている。

何よりも、その刃は中途半端で、レイピアに分類するには短すぎで、ナイフに分類するにも長い。

……だが、問題はその形状等ではない。

漆黒の刃、その先端に滴る赤い液体……。

俺の中を流れていた……俺の血だ……

「…………な……に……しやが……る…………」

意識が突然の出来事についていくてないのか、痛みはさほど感じなかつた。

「…………だが、腹部から流れ落ちる血だけは、止まることを知らない。…………ふむ…………君から、いかにも『証拠を見せろ』とこつ意思を感じたので、証拠を見せただけだが？」

特に悪びれた様子もなく、少女は俺の背中越しに、平然と答える。俺の腹から突き出た血の付いた短剣 黒のマンゴーシュを右手に握つたままで、少女は立ち続けている。

次第に驚愕は痛みに姿を変え、溢れ出る赤い液体にも意識がまわつてくる。

「うつ……あつ……がつ！？」

突然、刃がいきなり視界から消える。

ズズッ、と何かが引きずられる様な音が、腹の奥底から響く。

…と同時に、止まぬ腹部の痛みが激しさを増す。

腹部から抜き去られた刃には、大量の血が付着しており、黒色の本体が見えなくなるほどに血の赤で染まりきっている。

刃によつて塞き止められていた傷口も、その堰が消えた事により開き、それによつて血の流れ出す勢いも増していく。

「 そう喚くな。ほおっておいても死にはしない」

シルヴィアは、抜き取つた黒い短剣を振るい、血飛沫を床に飛ばす。

ゴシックドレスやその白く細い手にも大量の血が付いているが、まるで気に求めず、指に付いた血液を舐めとつている。

…それも…恍惚とした…表情で…

「 そして、ホラ。君は今、自分の軀からだをもつて、一つの事実の証明したではないか?」「 …しじつ…め…い…?」

流れ出る血を少しでも抑えるように傷口に手を当て、近くの壁に寄り掛かるようにして何とか体を支える。

短時間で大量の血を失いすぎたせいか、視界が揺らぐ。

白色のシャツは完全に赤い血で染まり…、だがなお染みは広がりつづけている。

激しい痛みも、既にそれを通り越して痺れに変わっている。

これが、一体何を示しているのだろうか…?

彼女が俺を刺したこと、そして俺が死にかけている」と…そのことに、一体何の意味があるのか。

シルヴィアは、何を見ているのか、さらに笑みを増す。

俺の死を喜んでいるのか?…いや、そうではないだろう。

あの日は、あの日が示すものは

「……シーッ？」

「…………やく氣付いたようだね。……自分の身に起きてこり」と
に

その事実に氣付いた……いや、氣付かされた俺は、その真相を知
るべく、血塗れのシャツの裏側のソレを確かめる。

「…………」

嘘……だろ……？

傷口は、完全に塞がっていた

血は確かに、傷口があつた場所の周囲にこびり付いてはいる。……
だが、それが噴き出したと思われる穴が、どこにも存在しなかつた。
知らぬ間に痛みも消え去り、荒れていたはずの呼吸も整っていた。
血をだいぶ失っていた筈なのだが、貧血を起こしているわけでも
なく、意識を失わずに立つていらされている。

それに、この出血量で、普通なら生きていられるわけがない。

『普通』……なら……

「…………そう。君が今知った事実……それこそが、この世の真理なの
だよ」

シリヴィアは、その不気味な微笑みを一層深め、擲つ様に言い放
つた。

「君は、人外の存在……、『吸血鬼』となつたのだよ

ヴァンパイア

「……俺が……吸……血鬼……」

「……どうした、何か問題でもあるのか？それとも……まだその事実を信じないでいるのか？」「……いや、そういうわけじゃない。……まだ、状況が飲み込めてないだけなんだ……」

「……ここまで懇切丁寧に教えたというのに……まだ理解できていないのか！？……君は他人の人間と違つて物分かりがいいと思っていたのだが……私の考え方違いか……？」

人の腹ヅツ刺して殺しかけたやつが何を言つているんだと言つてやりたかったが、死んでないので結果オーライ、眞実を知れたのだから得をした、みたいに軽く思つてゐるのだろう。

……無事だつたから良かつたものの、死んでたら俺はただのやられ損じやねえかよ。

悪氣もなく首を傾げて疑問符を浮かべるシルヴィアを見ていると、何だか怒る氣も失せ、怒りも冷めてきた。

「……いや、そうじゃない。確かに、全部を理解したわけじゃないけど、とりあえず今は、その『吸血鬼』ってやつを信じるしかない状況にいることは分かつてゐる」

「なら

「問題は、……そこじゃない。俺が疑問に感じてるのは、俺がいつ

『吸血鬼』になつたかつてことだ」

「……ふむ……それは確かに、もつともな疑問だな」

腕を組んだシルヴィアは、納得したように落ち着き、再びソファに腰を下ろした。

俺も、なるべく血を付けないようにしてソファに座る。

……正直、俺もまだこの事實を完全に飲み込めたわけではないし、

俺が伝説にしか聞かない化け物、『吸血鬼』になつたことも信じられない。

…だがしかし、同時にそのことが真実だとするなら、今までの不可思議な出来事の証明が可能かもしれない、とう考えに至つているのも事実だ。

田には田を、歯には歯を、超常現象には超常現象を……といつやつだ。

…だから、今だけはこいつの話を、信じてやつてもいいのかもしれない。

…そう、思えた。

シルヴィアが鏡士郎に毎食（朝の、しかも1時をまわつたばかりだというのに）の支度を命じ、彼に席を外してもらつてから、ようやく本題に入ることになった。

「…君に話そうと思つていた『一つ田の』こと……なんだが、実はそれこそが、君が吸血鬼もどきになつたことに関係しているのだ」

「…どうしたことだ？」話にくそうに口火を切つたシルヴィアの言葉に、反射的に言葉を返す。

シルヴィアが俺のことを吸血鬼『もどき』と指したことにも疑問はあるが…何よりもその『一つ田』の話について興味が沸いて来る。

俺について関係ある話なら、なおさらだ。

「…ふむ……どこから話せばいいのか分からないが……そうだな。

君は、一週間前、4月18日の夜のことを覚えているかい？」

「一週間前……？」

…確かに一度俺の記憶に穴が生じている時間帯だったはずだ。

その同時刻には、六本木の辺りで殺人未遂事件が起きている。

「それらのこととに、何か関係があるのだろうか？」

「いや。その日の夜のことは、何故か全く記憶に残っていないんだ。

「すっぽりと抜け落ちたみたいに、な」

「ふむ……やはりそうか……」

まるで俺の答えを予想していたかのような反応を見せた。

「やはり、こいつは俺の抜け落ちた記憶の、その内容と真実を知つていてるらしい。」

「知つてるなら教えてくれ。一週間の夜、俺の身に何が起こったのかを」

「…そうだな。…あの夜に殺人事件が起きたことは知つていいかい？」

「ああ。丁度俺の記憶が途切れてる時間帯つて事も知つていい？」

「…そうか。…実はな」

「…あの日、殺されかけていたのは、君なんだ」

「…やつぱりな」

薄々、その事実には気付いていた。

何故俺の記憶がすっぽり抜け落ちていたのかも、その時のショックであるなら、ある程度の納得ができる。

傷が癒えるのが早い吸血鬼になつた…っていう事実も合わせれば、次の日平然としていたいられたことも辻褄が合う。

「…感づいてはいたようだね。なら率直に言おう。…君が吸血鬼になつたのも、その夜だ。『ジャック・ザ・リッパー切り裂きジャック』の手によつてね

「切り裂きジャック……！？」

話には聞いたことがある。

確か…十九世紀末のイギリスで起きた未解決の猟奇殺人事件、『切り裂きジャック事件』…その犯人である、正体不明の殺人犯。

被害者の喉を搔き切り、内臓をえぐり取り、売春婦のみが、その男に殺されたと聞く。

「だが、その事件は百年以上も昔の話だ。二十一世紀の今、その事件、そして犯人が関係しているとは思えないが……。」

「『切り裂きジャック』は、人ではない。『吸血鬼の』殺人鬼だ」

「……なんだと？」

「嘘など付く意味が無いだろう？ これは紛れも無い事実……とはいえる、我々『王の一族』の者しか知らない事実ではあるがな」

「ある……か……ど……？」

聞き覚えの無い言葉を聞いた俺の呆けた反応に、シルヴィアは顔色一つ変えずに続ける。

「吸血鬼の王族のことだ。日本の中で例えるなら……そうだな、天皇と総理大臣が合わさったものだと思えばいい」

「……要するに、吸血鬼の元首であり、最高権力者でもあるってことでいいんだな？」

「察しがいいな。……そう、私たちドラケリア家を筆頭とし、カルン・スタイン家、クロロック家、バードリ家、レイ家の五家……とはいえる、バードリ家レイ家は、エリザーベド＝バードリ、そしてジル＝ド＝レイの代で潰えてしまつて、すでに存在しないから、性格には三家ではあるがな」

エリザーベド＝バードリと、ジル＝ド＝レイ……。

どちらの名前も、つい最近やっていたテレビ番組で流れている名だ。

エリザーベド＝バードリは、十六世紀から十七世紀のハンガリー王国の貴族であり、及んだ残虐な行為の数々や、処女の血肉を啜つことなどから、『血の伯爵夫人』の異名を持つ連續殺人犯。

もう片方のジル＝ド＝レイは、かの有名なジャンヌ＝ダルクと共に百年戦争を終結させ、その後、鍊金術に没頭した挙げ句、百人を優に超える数の少年を惨殺した狂気の殺人者。

…どちらも『虐殺』を行い、『吸血鬼』のモチーフとされた人物じゃないか。

カルンスタイン家とクロロック家には……あまり聞き覚えがないが……。

『王の一族』と言つだけあるからには、そこそこ有名なのだろう。

「……そろそろ、本題に戻るとしようか。先程、切り裂きジャック事件は吸血鬼の仕業、といつといつまでは言つたな？」

「ああ」

「更に付け加えるなら、まだ切り裂きジャックは現在なのだ」

「……なに？ ジヤあまさか？」

俺の言葉を遮るようにして、シルヴィアの口から信じたくなかつた事実が告げられる。

「その通り。君を襲つた犯人は……『切り裂きジャック』、模倣犯などではなく、その本人だ」

「……馬鹿な……そんな筈が……」

『切り裂きジャック』の犯行は、必ず喉を裂き、内臓をえぐり取るという方法で行われており、更に標的は必ず売春婦　女性であつたはずだ。

俺が標的になる理由なんてあるはずがない、と叫う考えは、続くシルヴィアの発言によつて打ち消された。

「……『切り裂きジャック』と言つ通り名は、あくまで『切り裂きジャック事件』の中だけの呼び名だ。　彼が、必ずしもその事件にだけ関わつているとは限らない……」

「……まさか……他の未解決殺人事件の中に、その『切り裂きジャック』の犯行によるものがある、ってことなのか……？」

「その通りだ。……正確にはほとんど、というべきだがな。彼の標的は、なにも女性だけに限られたことじゃない。男でも女でも、子供でも老人でも……誰でも標的になる。　君も勿論、例外では無か

つた、ということだ』

「…マジ…かよ」

十九世紀以降、世界には、何件もの迷宮入りになった事件が存在する。…そしてもちろん、犯人の正体すら掴めていない事件も少な
くは無い。

…もし本当に、それら未解決事件のほとんどに『切り裂きジャック』が関わっていたとしたら、俺が標的になつた理由も分からなく
はない。

「…もしかして、最近この辺で起きてる『切り裂き魔事件』^{セカンド・ジャック}に
も、それが関わっているのか?」

『切り裂き魔事件』。

最近、東京都のあちこちで無差別に行われている連續殺傷事件の通称だ。

十人ほどの被害者に共通するのは、年齢が十代後半から二十代前半ということだけで、血縁も職業も性別もまばらである。夜遅く、人通りの少ない路地裏などで犯行は行われている。

ここまで見ただけなら、到底『切り裂きジャック』を彷彿とさせるような事件ではないと思うだろう。

問題は、その殺害方法だ。

この一連の犯行に関すると思われる全ての被害者は、鋭利な刃物で喉を切り裂かれた後、心臓をえぐり取るという方法で殺されている。

ただ、残虐なだけじゃない。そのやり方が、あまりにも『切り裂きジャック』に似通つているのだ。

故に、この通称で呼ばれるよつになつた。

「君の聰明さには本当に敬意を抱くよ。…その通り、君も見方を変えれば『切り裂き魔事件』の被害者の一人ということだ。もつとも…君は喉も斬られず心臓も取られず…、そもそも殺されてもいいのだがな」

「なら…なんで『切り裂きジャック』は俺を殺さなかつたんだ?殺す相手に情けを懸けるようなやつじゃないとは思うが…？」

「そこまでは私にも分からない。君に何か感じるものがあったのか、それとも殺せない理由があつたのか。…そもそも端から殺す気が無かつたのか…、だがな」

話の途中、シルヴィアは急に立ち上がり、俺の左胸　心臓がある位置を、腹越しに人指し指でトン、と軽く突く。

「君の中に、奴が『因子』を残したのは、確実だ」

「…『因子』?」

「そつ。吸血鬼であるために必要なモノ。見たままを言えば、吸血鬼の『血液』だな」

「つまり、吸血鬼の血が俺の体の中に流れ込んできたから、俺は吸血鬼もどきになつたってことか?」

「そういうことだ。理解が早くて助かるよ」

昔から吸血鬼というものは、吸血されればその人間も吸血鬼と化し、その吸血鬼がまた他の人間に噛み付き、その人間を吸血鬼に変えていく…といった感じに、無限に増殖する存在として描かれることが多いが…どうやら本物の吸血鬼様がおっしゃることからだと、別にそういうわけではないらしい。

『因子』というものは言わば、HIVウイルスの様な、血液感染によって広がる、ウイルス性の何かの様なモノであり、HIVウイルスによって引き起こされるエイズの様に、一度感染してしまえば二度と元には戻らない　つまりは人間には戻れない、ということらしい。

「どうして君は、そこまで落ち着いていられるのだ？…普通の人間なら、今の話を聞いた途端に泣き喚き、『元に戻してくれ！』などと縋り付く、などしてもおかしくはないだろうに」

シルヴィアが俺の顔を覗き込むようにしながら、怪訝そうな顔をする。

…つい最近までただの一般人だった俺が、いきなりこんな状況に陥ったというのに落ち着いていることに驚いているのだろう。

…つて、言われてもなあ……。

「まだ、あんまり実感が湧いてないんだよ。自分が殺されかけたことも、吸血鬼になつたことも…。もしかして吸血鬼って、人間と体の造りは大差ないんじゃないか？」

「…厳密には違う点もあるが…確かにその通りだ。ほとんどが人間の創作による『設定』だからな。…十字架、聖水、銀、ニンニクに弱いと言うのはもちろん嘘、太陽の光に当たると灰になつてしまるのは、少々大袈裟に言い過ぎだ。あくまで私達は、日光に含まれる強力な紫外線に弱い肌の造りをしているだけなのだからな。…あとは、少し人より頑丈なくらいだ」

「それはさつき実践させられたから分かるけどさ……俺、この一週間で日光に当たりまくつたんだけど……大丈夫なのか？」

今さらながら心配になつてきたのだが…俺はこの一週間、自分が吸血鬼になつたことを知らなかつたため、普通に田中外を出歩いてしまつっていた。

吸血鬼としては中途半端である俺も、流石にその点だけは心配になつてしまつ。

「心配しなくとも、君に流し込まれた血の量は微々たるものだ。どちらかと言えば、体質的には人間に近いだろうから、日の光の影響を受けることはないだろう。変わつているところと言えば、人間にしては高すぎる身体能力と打たれ強さぐらいかな」

「ならないんだが…」

反応は薄いが、内心はとてつもなくホッとしていた。

死亡診断書に『死因・日光による突然死』なんて書かれたら、末代までの恥だ。

「…まあ何にしろ、今の我々がすべきことは、たった一つ
シルヴィアが、俺の目の前で人差し指を立てる。
雪のように白く、纖細な指先は、握つただけで折れてしまいそう
な感じすらした。

「…『切り裂きジヤック』の正体解明、及び連續殺人の阻止…そ
れだけだ。…協力、してもらえないかな？」

立てられた指は下ろされ、代わりに握手を求めるように、手が差
し延べられる。

「…嫌だ…とは言わせてくれないんだろう？」

「フフッ…もちろんだよ。…ここまで教えたんだからな」

最後の言葉を交わし、お互いに微笑み合ってから、俺はシルヴィ
アの白い手を握る。

冷たいと思われていた手は意外と暖かく、血が通つた、俺と同じ
『生物』であることを示していた。

そうだよな。

この世に人間という存在があるように、吸血鬼という存在もまた、
他の生物と同じ様に極当たり前の様に存在しているんだ。

信じてみても、いいのかもしない。

例え、こいつの話したことが馬鹿げた話であつたと言われたにし
る、こいつはそれを真実だと言つているんだ。

実際は誰もこいつの話を否定できはしない。真実かどうかな
んて確かめようがない。

だつたら、信じてやりたい。協力してやりたい。

…心から、そう思えた……。

「……お嬢様、昼食の御用意をお持ちしました」

「（）苦労様、鏡士郎。…今日の食事も相変わらず美味しそうだな。
流石は私の執事だよ」

「勿体無きお言葉、嬉しく思います。 それはそうと、お嬢様……」

遼が居なくなつた部屋、鏡士郎がテーブルに昼食を運んで来る。
流石に血塗れになつた服で帰るわけには行かないでの、風呂場で
血を洗い流してもらつていい。

時刻は午前1時30分。私達吸血鬼にとつての昼食をとるべき時
間だ。

……まあ、人間の彼からしてみれば、この時間は普段なら寝静まつ
ている時間帯なのだろうがな。 鏡士郎が淹れ直した紅茶の香りを
私が味わっている時に、鏡士郎が不意に質問をしてくる。
どうやら、話自体は厨房からでも聞こえたらしく、私が遼に教え
た内容はほとんど把握しているようだった。

「どうした、鏡士郎。 何か気になることでもあるのか？」

「いえ、気になるというほどでもありませんが……、彼・神谷 遼
様に、伝えていないことがあるのですがありませんか？」

「ふむ……アレのことか。…今はまだ、話すべきでは無いと思つ
たから、敢えて言わなかつたのだが……」

「……と、言いますと？」

血が付いたテーブルクロスは取り替えられ、綺麗に片付いた食卓
の上には豪勢な食事が並んでいく。 吸血鬼は基本、野菜を取らな
くても生きていけるため、牛肉を中心とした食事を取ることが多い
(豚肉も食べないことはないが、滅多に食卓に上がる事はない)。
その名の通り、人の血を飲むこともあるが……、美味である故に手

に入り難い」ということもあるから、普通の吸血鬼は基本、動物の血を飲むことが多い。

…とはいえ、飲まなければ死ぬというわけではなく、生きていく分には何の問題も無い。

「…今の彼には、必要な無い情報だと思つ分もあるが…何より、これは彼のためでもあるからな」

紅茶を啜り、音をたてないようにテーブルに置き……

…その、言葉を…

「…『狂氣の因子』…彼がそのことを知れば

…言い放つ。

「私は、彼を殺さなければならなくなる」

「本当に、塞がってる……」

温かいシャワーを体に浴びつつ、腹の傷 シルヴィアに刺された場所だ がある場所…正確には、傷が存在したはずの場所をなぞりながら呟く。

シャワーを浴びる前は、まだ黒々しい血が肌にこびりつき、流血はまだ止まつていらない様な気がしたのだが……。

「俺：吸血鬼になつたんだな…」

改めて口にしてみても、やはり実感はあまり湧かない。

傷口は綺麗に塞がり、元からそこには何も無かつたかの様に跡一つ残つていない。

痛みも無ければ、疼くこともない。まるで刺された事実自体が嘘であるかの様に。

血の流れも…正常だ。致死量に匹敵するほどの大量の血を流したと言つのに、貧血すら起こしていない。

…変化というものは、自分が気付かぬ間に突然訪れ、そして自分が元からそうであるかの様に溶け込んでいく。

誰も気付かないぐらいに小さな変化も、立場や生き方を大きく変えてしまうくらいに大きな変化も、自分にとつては同じ、『変わらぬ事象』として思い込まれてしまう。

…それが例え、別の種族 吸血鬼への変化だとしても……。

「……ふう……」

風呂場全体を見回すと、あらゆる所が光り輝き、一人で使うには広すぎる浴槽に、少し居心地が悪くなる。

外見はアレなクセに、何故ここまで内装は豪華なのか。……それと、何故ライフラインが通つているのか、という疑問が浮かぶがあえて考えないようにする。

何だか湯舟からは薔薇の香りがするし……いかにもビックの大富豪なんかが入りそうな超豪勢な風呂だな……。

庶民の俺にとっては、疲れが取れるどころか、逆に肩が凝りそうな気しかしない。

：何だか浸かつてはいけないような感じがする。

ただでさえこんな豪勢な風呂に入らせてもらつているのに、さらにお金をかけられた様な湯舟に浸かるなど、おこがましいにもほどがある。

：単にこの薔薇臭い風呂に入りたくないっていうのが一番の理由ではあるのだけどな。

：というか、今すぐにでもこんな風呂出でてしまいたい。シャンプーはラベンダー臭いし、ボディーソープはシトラス臭くて堪らん。

：貴族ってのは、こんなに臭いのキツいものしか使わないのか？

とにかく、この鼻の曲がりそうな空間から逃れなければ、風呂に入つた意味も無くなる気がする。

なので、とつとつ場所から脱出してしまおうと、風呂場の引き戸に手を掛けようとする。

：だが。

ガララララッ。
スカツ。

「あれ？」

俺が触れる前に、扉が勝手に開く音がする。

いくら貴族の家だからとはいえ、風呂場に自動ドアが取り付けら

れるほどに余裕があるとは思えないし、そんなことする貴族なんて聞いたこと無い。

…第一、入ってきた時にはただの引き戸だったじゃないか。

そうなると他には、別の誰かが入ってきたとしか考える余地が無い。

今日…というかつこさつき、この家にいる人物をパツと確認させてもらっていた。

今この家にいるはずの人間　もとい吸血鬼は確か、シルヴィアと鏡士郎の二人のみ。メイドも召し使いも家族もいなかつた。ようするに、今この場にいるはずなのは、俺と同性の…鏡士郎であるはずなのだ。

（なんだ…なら別に気にする意味はないな…）

…と思つて、少し上を見たのが間違いだつた。

「…えつ？」
「…はつ？」

最初に視界に飛び込んできたのは、薄い布地に包まれた、白い肌と一つの膨らみ。大きくも無く小さくも無く、健康的としか言いようが無いサイズだ。

…あの細身の執事、こんなにバストサイズがでかかつたつけな。

その次は、細い首元のライン。綺麗な鎖骨が目に飛び込んでくる。鏡士郎は筋骨隆々と言つほどガタイが良いわけではなかつたが…、ここまで細く括れていただろうか。

最後に、顔。血色のいい桜色の唇、形のいい鼻、紅く紅潮した頬、驚きと羞恥に満ちた目。

「…」まで確認して、俺はようやく、目の前の事実と、自分に

これから起るであろう事を悟った。

…田の前にいる…シルヴィアじゃん。

さっきまでの露出度0に近かったゴシック・ドレスを脱いだシルヴィアは、着痩せするタイプなのかはたまた服の形が悪いのか、意外とスタイルがいい体つきをしていた。

一応タオルで胸から太ももの辺りまではタオルで隠しているものの、ほぼ全裸に近いその恰好は、先程までかい態度をとっていた吸血鬼のお嬢様の姿とは、まるで別物であった。

「…」

田と田が合つてからすでに30秒近く経っているのに、一向にシルヴィアの反応はない。

…バグったゲームソフトみたいに硬直しており、視線の位置がまるで変わる様子がない。

「…え…えっと…大丈夫か？」

さすがに放置したままにしておくのはマズイかなと思つた俺は、取り合えず声だけはかけてみる。

そしてそれとほぼ同時に、今の行動が俺に更なる悲劇をもたらす引き金であつたことを悟つた。

「？？～～～！」

俺の言葉によって硬直を解いたシルヴィアは、風呂に逆上せたでもなく急速に顔を赤らめ、言葉に成らない叫び声をあげる。

白い肌が急に真っ赤になつて、まるでリトマス試験紙の如く色の変わり様だな、と頭の中で冗談を思いついた次の瞬間

「うじはッ！…？」

突如視界が歪み、腹部に強烈を軽く通り越して激烈な衝撃が発生する。

発生源は、勿論シルヴィア。使用された鈍器は、吸血鬼の血

によって強化された強靭な右足と、それを圧倒的なスピードで奮う驚異的な脚力（付け加えるなら、彼女の俺に対する怒り…か？）。

棒立ちで竦然としていた俺は、当然防御は愚か、反応すら出来なかつたので、シルヴィアの蹴りはノーガードでダイレクトに直撃。その衝撃は、俺の脇腹に多大な損傷を与えてくれやがつた。

しかも人の蹴りならまだしも、こいつはそんな柔なもんじゃなく、歴とした吸血鬼。その蹴りの鋭さは、ムエタイ選手も裸足で逃げ出しそうな、違う意味での『岩をも碎く』威力を持つている。

当たり所が悪かつたら、即死だつたかも知れない。

…しかし、それだけで済むはずが無かつた。

音速に迫る速さの蹴りは、音速に迫る運動エネルギーを俺の体に与える。

脇腹の骨が折れたような鋭い痛みを感じる暇もなく、俺の体は背後の壁に向かつて宙を突き進む。

しかし、その疾空感（といつよりただの恐怖）も一瞬で途切れ、俺の体は急停止を実行しようとした。

風呂の壁に、体感速度時速何百キロものスピードで衝突した俺の体は壁に減り込むと思いや、余程壁の対衝撃性能が高いのか、石のパネルにぶつかっただけであった。

背中に激痛を感じたのもつかの間、壁に張り付いた体も重力には逆らえず、パネルに引っ付いたままズリズリと滑り落ちていく。

が、たかが一撃で女子の柔肌を晒してしまったお嬢様の猛攻は止まりはしなかつた。

透かさず落ちていた金メツキのスチールらしいを掴んだシルヴィアは、プロ野球選手も青ざめるほど剛速球ならぬ剛速盤たらいを投げつけてくる。

「ぬおわッ！？」

何とか意識を保っていた俺は、首を少しだけ左にずらしてそれを避ける。

ドゴーン、と盛大な音と土煙、その後のガラガラという何かが崩れていく音を聞き終え、むせながら右隣を確認する。

さつき俺がぶつかってもびくともしなかつた壁に、鉄製のたらいが見事に減り込んでいる。

これがもし俺の頭に当たつていたとしたら……。

「いっ、いきなり何しやがるんだよっ！？」

「つるさいッ！黙つて死ね！！」

理不尽過ぎる。

有無を言わぬす、さつき「協力しよう」「といった相手を、たかが一度の覗き（俺はそんなことしたつもりは無いが、恐らくそう認識されているだろう）で殺そつとするなど、幾ら何でも無茶苦茶だ。中学の時、幼なじみの少女の家に泊まりに行つた際、（不可抗力とは言え）風呂に入つている所を見てしまつた時でも、「もう絶交するから」と言われ、約一週間口を聞いてもらえなかつたことはあつたため、年頃の少女にとつて、風呂を覗かれることもとい、裸を見られることが、どれだけ恥ずかしいことなのかぐらいは理解しているつもりだった。

少なくとも、この時までは。

「まつ、待て、シルヴィア！これは事故だ！不可抗力だ！俺は何も

」

「つるさい黙れ死ね消えろこの下等変態新人類ツ！？」

さつきの悪態に何個か新しい単語が混ぜ混まれ、新たに投げ飛ばされる飛来物という余計な手土産と共に、俺の下に帰つてくる。

…下等変態『新人類』つて……。さつきアンタが俺を『吸血鬼もどき』になつたつて言つたばっかりじゃねえのかよ。

『下等』と『変態』にも、色々と批判したいポイントが有るのでがそれは後回しにして、今は眼前の修羅を止めることが先決だ。

「おつ、落ち着け！風呂場で死人を出す氣かよ、お前は！」

「それも止むなし、だッ！？」

ヤバい、こいつ平常心を失つてやがる…。

風呂場に置いてあるものを手当たり次第に投げまくつてくる鬼ならぬ吸血鬼は、まるで止まる様子が無い。

一応持ち前の反射神経の良さでなんとか全部避けてはいるものの、機関銃の弾の如く連続で襲い掛かつてくるのを避けきるのに相当体力を消耗してしまった。

これでは、こいつの行動を止めなければ、いずれ俺の心臓の鼓動が止まってしまう気がする。

「 ちょこまかとオ……逃げるなア！！！」

大きく振りかぶって、シリヴィアが投げつけてきたシャンプーの予備ボトルが、遂に音速を超えた。

「 ちょっ……！ こんなの避けきれるわけがツ……！」

「 ぐおッ ……！」

反応がほんの一瞬どころか完全に遅れてしまった俺の顔面に、容赦無い一撃が叩き込まれる。

薄れゆく意識の中で、俺はただ痛感した。

女の子つて……怖え……。

俺は、あれから1時間ほど意識を失っていたらしい。

何かがたたき付けられたり、破碎されたりする音を聞いた鏡士郎が駆け付けた時には、時既に遅し、俺は風呂場のタイルの上に大の字で伸びていたらしい。

背骨にはヒビが入り、肋骨を何本か骨折、頭部に激しい打撲……。

正直、吸血鬼の驚異的な再生能力と頑丈さが無ければ、今頃天に

召されていたのかもしれない。 実家の習慣で、タオルで下半身を隠すようにしていったからこれくらいで済んだのだと思うべきなのが……。

後で鏡士郎に聞いた話なのだが……曰く「お嬢様は激怒なされた時の仕打ちは、あんなものでは済みませんでしたよ」らしい。
…あれでまだ激怒状態じやないのかよ。これ以上のキレつぶり見せられたら、吸血鬼になつたとはいえ、流石に体が持たないぞ。
…あの怒りつぶりでも、人間が相手なら死人が出たかも知れないのでが……。

「 全く！君がそこまで淫猥な男だとは思わなかつたぞ遼ツ！！
…だから不可抗力だつてんだろ。俺にどうやつてあの状況を回避しろつてんだよ…………」

羞恥のあまり顔を真つ赤にするシルヴィアは、風呂上がりだというのに、また似たような露出の少ないドレスをまた着ている。…同じのを何着も持つてゐるのか、それとも着回しているのか…。

肌はしっとりと水気を含み、表面にはツヤが現れている。触るとモチモチと弾力があつて柔らかいんだろうなあ…………。

などと思っていると、俺の視線に気付いたシルヴィアはこちらを振り返り、そのしかめつ面の深みを更に増す。

「 何をそんなに変質者の眼差しでジロジロ見ていいのだ？…その目、潰してやるうか？」

「 怖いこと言つくなよ…裸を見たことはさつき散々謝つたし、手痛い仕打ちも受けたんだから、そろそろ機嫌直してくれよ？」

「 ……変態と聞く口は持ち合わせていない」
だめだこりや。

完全にへソ曲げてやがる。

こういう時は、何か女性を喜ばせるようなことをして「機嫌取りをするのが定石であると聞いたことがある。

…だが、俺に女性を喜ばせる才能は皆無、昔から『女心と秋の空』と書つように、俺はまるで女性の心境が理解できなかつた。…とい

うか、周りにいる女性が、母親と同じ年の幼なじみぐらいだったから、別に理解しようと思ったこともなかつた。

方程式でも、法則でも、ましてや単純な暗算ですら説き明かせない女性の心は、俺にとつてはどんな難題よりも遙かに理解しがたいものだつた。

なので、今の俺にこいつを宥められるだけの手段がない。

故に、俺に出来そなことはただ一つ。

「そもそも、なんでお前は俺が入つてゐる風呂に入らうと思つたんだよ。脱衣所に俺の時計と財布が置いてあつたはずだし、それ以前に誰かが入つてることぐらい分かるだろ、普通」

俺が風呂場不法侵入の原因を問おうとするが、さつきまでのおしゃかさは何処へ、冷静さを完全に欠いた様子で、シルヴィアは返していく。

「そんな小さなものの気付くはずが無いだろッ！…脱衣室から君の服を持つて出てきた鏡士郎が『遼は既に風呂から上がつた』という旨の発言をしたのだ！明かりが燈つていたのは、単に付けたままにしてあるだけなのかと思つた。それ以外に理由はない！」

「…あのさ、嘘付くなら、もつと上手くやれよ。…俺は風呂に入る直前に、お前んとこの執事に直接服を預けてんだから、アイツがそんなこと言つはず無いし、そもそも…あれ？」

その話に、一つの小さな共通点を見つける。

シルヴィアもそのことに気付いたのか、下を向いて考えこんだ後、ハツとなつて顔を起こした。

「…もしかして…だが、この一件…」

そう、俺とシルヴィアの…一人の話に共通していたこと……

それは『タイミング』だつた。

俺がアイツに服を預けたのは、風呂に入る直前。そしてシルヴィアが鏡士郎に会つたのは、洗面所の扉の前（と推測できる）。更に言えば、シルヴィアが風呂に入ってきたのはその直後。

……と、すれば、即ちこの一件は

「「 鏡士郎の所為かつ！」」

さつきまでの口論がまるで嘘のようだと思ひタリに声を揃えて叫んだ俺とシルヴィア。叫びざまに立ち上がり、真つすぐに廊下に繋がる扉目指して進みだす動作までシンクロする。

そして、俺達が同時にドアノブに手を掛けようとすると寸前、扉が廊下側に開かれる。

中に入ってきたのは勿論、この状況を楽しみ廻くしていると思われる外道執事、菊岡 鏡士郎。

トレイの上に二つのティーカップと、鞘に納まつたナイフの様なものを乗せ、何事もなかつたかのようにしている。一つ壁の向こうなのだから、俺とシルヴィアの騒ぎ声は聞こえていたはずなのだが、反応が何も無いと余計に腹が立つ。

「失礼します、お嬢様。お茶と、お申しつけなさつたモノを持って参りまし 」

「鏡士郎ッ！遼から全てを聞いたぞ……よつするにて、全部お前の所為ではないかッ！」

鏡士郎が何かを言い終える前に、シルヴィアが思い切り突っ掛かつていく。

手足をぶんぶん回しながら、顔を真つ赤にして殴り掛かろうとしているが、鏡士郎は笑顔のままトレイを持つてない左手で頭を押さえ受け止めている。

いつもこんな茶番をやっているのか、鏡士郎はかなり手慣れた手つきで目の前の小猛牛をいなしているし……その小猛牛ことシルヴィアは、鏡士郎より短い腕をグルグル回して、届かない距離を必死に埋めようとしている。

…おい主人。それでいいのかよ。

ムキ？？ツ！！となつて回転速度を増した腕で更に攻撃を仕掛けようとしているが……無駄。幾ら腕を速く回しても、鏡士郎の腕の長さを超えることなんて出来ないからな。…というか、いい加減学

習しろよ。物投げるとか押さえてる腕を殴るとかしないと、鏡士郎に一矢報いることなんて夢のまた夢だぞ。

アハハツ、とこの状況を楽しんでいるように笑いながら、鏡士郎はトレイを机の上に置き、そのまま話し出す。

「…お嬢様がドラケリアの屋敷の外に出られてから、まだほんの一
年ほどしか経つておりませんので……一つ、異性の方と触れ合う機
会を持つのも、良い経験となるのではと思いまして……。差し出が
ましいことをしました、申し訳ありません、お嬢様」

…その言葉を、笑みを浮かべたまま言つものだから、こいつから
はあるで反省してる様子が伺えない。

しかも、その言葉の中には全部シルヴィアに対する
謝罪のみ。俺に対しても、『少しも』どころか『全く』謝罪の意志
を示していない。…といつかたぶん、こいつは俺に謝る気が無い。
一番の被害者はどう考へても俺であるはずなのに。

…そろそろ見ていいだけの立場にも耐え切れなくなつて、シルヴィア同様直接攻撃を仕掛けに行つてやろうと思つて、立ち上がるう
とした瞬間

「鏡士郎!お前は一つ、とお?????つても、大切なことを忘れ
ている!」

シルヴィアが、俺と鏡士郎の間に（元々そこにいたのだが）
割つて入つて、仁王立ちになり腕を組んで立つ。

さつきの…会つた直後の妖艶な第一印象からは、想像の斜め
上を行くほどの甚大なキャラのズレつぶりだが、そこはあえてツッ
口まないようにしておく。

シルヴィアがなにを言おうとしているのかは分からぬが、何か
強い意志を感じる…気がした…はずなのだが…。

「…だ、男女のお付き合にはツ…まつ、まづ…、手を繋ぐ」と
から始めるのが定石であろうがツ……」

「ツツコむ所そこじやねーーだろうがツ……てか、どれだけ初心
なんだよ、お前ツ…今時そんなことから始める奴なんてほとんど

「いねーよッ！……」

頬を染めながらもの凄くレベルの低いことを言つシルヴィアに、柄にも無く思い切りツッコミを入れてしまった。

多分、本人は眞面目も眞面目、大眞面目に言つたのだろう。顔がどんどん紅潮していつてるし。

けれど、あくまで人間の常識の中にいる俺にとってその姿は、異性との接触がまるでない箱入り娘、未経験の処女にしか見えない。が、ここにまた、俺の想像を絶する出来事が起こってしまった。

「申し訳ありません、お嬢様。私は……間違えておりました、

そんな簡単なことすら……」

「うむ。分かればいいのだ、分かれば」

…鏡士郎が、素直に謝りやがつた。深々と頭を下げながら、慇懃無礼に。

ふざけているのか大眞面目なのかは、頭を下げているため表情が読めないから分からぬが、形だけなら非常に丁寧な謝り方だ。…けど

「…謝る所も、そこじやねえだろ」

呴かずには、いられなかつた。

鏡士郎が淹れたお茶を啜りながら、漸く落ち着きを取り戻したシリヴィアは再び優雅に振る舞う。

鏡士郎も鏡士郎で、何事もなかつたかのようにシリヴィアの後ろに控えている。

唯一、俺だけが居心地の悪さを感じていた。

ま、そりや当然だろ。

机の上にドカッと、銀の鞘に納まったナイフを、思い切り差し出されていたら、な。

「…」これは何だよ？」

「そんなこと聞くまでも無いだろ？見たままの、ナイフだ。正式に言えば、このナイフはトレンチナイフ、と言つてな。第一次世界対戦時に、狭い塹壕の中での歩兵戦用に作られた近接武器で」

「そういうことを聞いてるんじゃねえ。なんでこれを持って来て、俺の目の前の机の上に置き、いかにも『取ってください』と言わんばかりにしていることの理由を尋ねているんだよ」

「…ああ、そのことか。それならもつと単純な話、君にそれを受け取つてもらいたいからそこへ置いたまでのことだ。…まあ、護身用、とでも思つてほしい」

「護身用……？」

もう一度、机の上のナイフの方を見つめ直す。

刃渡りは18cmほど。ナイフにしては大振りだ…と思われる。鞘の周りには革のベルトが巻き付けられており、恐らく携帯や秘匿も可能にしているのだろう。

黒色の柄にはナックルガードとグリップが備えられており、とても握りやすい。実用性重視であることは、まず間違いない。

刃を抜くと、刃のすみからすみまで、目映く輝く銀一色に彩られており、無駄な装飾が一切無い、シンプルな作りをしているのが分かる。

極めつけは、純粹な銀刃が仄かに帶びた、紫色の輝きだ。普通の銀ならば、有り得ない発光現象だが……。

「その剣は、我がドラケリア家に伝わるもの。吸血鬼の苦手とする『紫外線』を纏うよう、我等が持つ魔術と鍛冶能力の全てをもつて打たれた、吸血鬼殺しのための剣、『ソエベッショ串刺し公』だ」

「『串刺し公』……これ、お前の家の家宝、なんだろ？そんなに大切なものの…俺なんかに預けてもいいのか？」

だが、シルヴィアは躊躇つことなく、あっさりと返事を返してきた。

「構わないよ。私も鏡士郎も、その剣を戦闘で使うことはないし…何より、まだ吸血鬼同士の戦いに不慣れな君には、少しでもアドバンテージがあつた方がいいだろうしね」

「…そうか…なら、有り難く受け取つておく」

「そうしてくれると助かる。君には、まだ死んでもらいたくないしね」

俺の返事に満足した笑みを浮かべたシルヴィアは、飲み干した紅茶のカップを鏡士郎に預け立ち上がり、部屋の外へと出るため、扉の方へと歩みだす。

「…さて、そろそろ…我々吸血鬼にとっての『昼寝』の時間のようだ。…今日は色々なことがあつたから、少し疲れてしまった。私はそろそろ、床に着くことにするよ」

時刻は3時をすでに回っている。ここに来てから、もう三時間も経つたと考えるべきなのか…あれだけのことがありながら、まだ三時間しか経つていないと考えるべきなのか…短いようで、とても、とても長い時間だった。

そう俺に思わせる核となつた少女は、扉を少しだけ開き、再びこちらを見据えて来る。

…威厳と風格を兼ね備えた、厳しくもどこか優しい眼差し…。

その強い意志を秘めた美しき紅の眼に、俺は自然と引き寄せられていいく。

いつたいどれだけの時が流れただろうか

見つめ合う一瞬が、何分にも何時間にも…いや、永遠に等しいとすら感じられた。

それほどまでに、俺は彼女の眼に引き寄せられているみたいだった。

「 また会おう、遼

「 ああ。…またな」

交わす言葉は、それ以上必要なかつた。

何も言わずとも、見つめ合ひの瞳から、必ずと意志は伝え合ひ」とは出来た。

『死なないでくれ』といつ小さな願いと、『絶対死がない』という小さな決意。

それを交わしただけで、十分だつた。

「…さて、もうそろそろ俺も帰るとしようかな」

風呂から出た後から今まで借りていた服を返し、高速乾燥機で乾かされた私服に着替え、最初にこの場所に入ってきたとき通つた扉をぐるりと相変わらず不気味で裝飾華美な巨大扉を押し開けようとする。

「お待ちください、神谷君」

扉の取っ手を握り、思い切り押し開けようとした瞬間に、背後から声がかかる。

振り向かずともすぐに判断できる。菊岡 鏡士郎だ。

「…まだ俺に何か用があるのか？」

振り向かないままに、質問を投げ掛ける。

忘れ物の用事でも、シルヴィアからの伝言でもないだろう。ほと

んど手ぶらの状態でここに来たわけだし、シルヴィアは既にベッドの中でも寝ているはず……なのだが……。

「……貴方に一つだけ、忠告をしておきたいのです」

「……忠告?」

「はい。……单刀直入に言わせてもらいます。神谷君、貴方には

」

慇懃無礼な態度な中にも、微かな威圧感。それまでの柔らかな雰囲気など微塵も感じさせない。

……だが、俺が驚愕したのは、そこだけではない。彼は、従者としてあるまじき発言を

「……この事件に、これ以上関わらないで頂きたいのです

今、俺の目の前でしたのだつた。

「この件に関わるな、だと?…何を馬鹿な」と言つてんだよ、アンタは。…そもそもこの件に関わることになつたのは、アンタの所の主人が頼んできたからじゃねえか。なんで主人の考えに背くような真似してんだよ」

この空間からの出口である扉に背を向け、目の前に控える漆黒のスーツを纏つた青年執事・菊岡 鏡士郎を睨みつける。

一方の鏡士郎は、俺の視線をまるで気にすることなく、毅然と構えていた。

眼鏡の奥の瞳の蒼は揺らぐことなく、ただ一点 僕の瞳を見据えている。

何を思い、何のために俺にこの件から手を引くように促しているのかは分からぬ。…だが、その意志の強さだけは、ひしひしと伝わつて来る。

一瞬の静寂の後、依然として俺を睨みつけたまま、俺の問いに答えるように言葉を発し始める。

「…私は単に、貴方の身を案じてゐるのですよ」

「どういう意味だよ。…既に俺はこの件の関係者、逃れられない状況まで來てるんだよ。もう何度も殺されかけてるからどれだけ危険なのかは重々承知して」

「あの程度で私達の生きる『世界』の全てを知つたと思つてゐるなら、大間違いですよ」

俺の言葉を遮り、大きさの増した声で威圧的に、鏡士郎が反駁する。

忠告……いや、これは『警告』……もしくは『命令』の域に達している、そう考へてもおかしくはない、強く低い声色だ。

敵意……は、無いようだが、どうしても体が勝手に身構えてしまつ。

冷や汗が額を流れる。平静を保つていたつもりだったのだが、内心は動搖していたみたいだ。

この雰囲気は……そうだ。シルヴィアの言い知れぬあの威圧感。アレに似ているのだ。

「お嬢様も、全てのことを貴方に話されたわけではありません。故に、貴方はまだ私たちの全てを把握したとは言えませんでしょう？」

「……それは……」

正論過ぎて、全く反論出来ない。

確かに、鏡士郎の言っていることは正しい。

シルヴィアから聞いたことだけでは、まだ何か足りていないうな、核心に至っていないのは、俺も端から気付いていたことだ。
……だが俺は、それを承知の上でこの件に首を突っ込むことを決めたのだ。それでも他人に口出しされるのは、あまり気分の良いことじゃない。

俺の反駁を許すことなく、間髪入れずに鏡士郎は言葉を紡ぐ。

「……それに、貴方がこれまで生き残ってきたのは、お嬢様が貴方を直接護衛なされていたからなのですよ」

「……！」

その事実については初耳だった。

この一週間、確かに何かあってもおかしくは無い気がしていたのだが、結局何事もなく時は過ぎていった。

しかしそれが、シルヴィアのおかげによる平穏だったとは思いもよらなかつた。

……だからあいつは、俺の顔を初めて見たような反応を見せなかつたのか……。

それと同時に、もう一つだけ引っ掛かることがあつた。

「……じゃあもしかして、事件の日以降、俺を見ているようなあの薄気味悪い視線は……」

「…間違いなく、殺したはずの貴方が生きていることに気付き、自身の不始末の隠滅を図ろうとしている『切り裂きジャック』本人…もしくはその手下、信奉者、関係者の何れか…でしょう。仕掛けた来なかつたのは、お嬢様の護衛に気付いていたから…と思われます」

「…やつぱりか…」

推測したことに関しても納得すると同時に、的を射ていた鏡士郎の発言に少しばかり驚かされる。

俺もついさつきの話からよじやく察することができた事実を、まるで最初から知っていたかのように述べていく。

実を言えば、俺が妙な視線は、記憶の無いあの夜から一週間ずっと感じ続いていた。

特定の時間帯 每晩日が落ちきつてから、朝日が顔を出すまで。
特定の場所 ある程度、周りを見渡せる広い道で。

特定の感覚 ジトジトと俺を観察するような、ネットリと絡み付くような、奇妙な、そして不気味な感覚が。

…それがもし、再び俺を殺そうとする者の眼差しだと言つのならば、全ての辻褄が合つのだ。

が、それはあくまで推測の話。根拠の無い不確定事実だ。

「…どうしてそこまでハッキリと言いきれる?…確かに俺もその可能性にはたどり着きはしたけど、断定できる事実では無いだろうに」「…言つたでしょ?貴方はまだ、吸血鬼の『世界』の全てを知っているわけではない、と」

「質問の答えになつてねえぞ」

「なつていますよ。吸血鬼の『世界』では、そういうことは日常茶飯事ですか?」『れぐら』のことはあつて当たり前です

「…そんなもんかよ」

「ええ。そんなものですよ」

その威圧を揺らがさずままに、笑顔を浮かべてニッコリ笑う。

余裕があれば『怖いから止める』とシッコミたい気分だが、今は

そんな気分ではない。

「… だとしても、俺はこの件から下りる気はない」

「… 何故ですか？」

先程までの笑顔から一変、再び怪訝そうな表情に変わる鏡士郎。この話を俺に聞かせて、少しでも俺の考えを変えようとでもしていたのだろうか。：だが、残念だったな。

「… 俺は一度決めたことは、意地でもやり通す主義なんだよ。あんたの話きいたぐらいで、はいそうですねと簡単に同意できるほど素直でもねえしな」

「… そうですか。残念です」

「残念そうには見えないけど？」

「そういう顔の作りをしているのですから」

鏡士郎は、意外とあっさり引いてしまった。

もつと力押しでくると踏んでいたのだが、別にそういうわけでも無かった。残念そうな顔をしてはいるが、ただそれだけ。

その内に秘められた真意は、表情からはまったく読み取れないが。

「… ですが、この件に関われば、もつ私達も貴方の身の安全を保証することは出来ません。… それでも」

「危険は、覚悟の上だ」

「… そうですか。ならこれ以上、私が貴方の考え方を否定するのは野暮というものですね」

向こうも納得した… というより、俺の意地とやり合つても勝ち目が無いと悟ったのか、漸く威圧するのを止める。

それを見て安心して、俺も肩の力を抜く。

… 緊張ていたらしく、体中がガチガチに固まっていたらしい。

ぐるりと回つて背中を向けた鏡士郎は、背中越しに最後の用件を話す。「私達も出来るかぎり貴方に危害が及ばないように心掛けます。なので、あまり無茶はしないようにして下さい」

「…分かつてるよ、それぐらい」

「分かつていただけたなら幸いです。…お気を付けてお帰り下さい。

近頃の夜中は物騒ですからね」

「…今も昔も変わんねえよ。それじゃあな

憎まれ口を軽く叩いてから、扉に掛けていた手に力を込める。

ギイ…と、来たときと何も変わらない不気味な音を放ち、扉は見た目に反した軽さで開け放たれる。

つた。

「……見送りぐらいしろつての」

そこはいない人物に再び悪態をついてから、閉じられた扉を背にして、俺は帰路についた。

まだ日は昇つておらず、街灯も消えた裏路地は、少し先が何も見えないぐらいに真っ暗闇だつた。

辺りには全くと言って良いほど人影が無く、物音一つ鳴らない。

聞こえるとすれば、俺の呼吸、足音、服が擦れる音… それぐらいだ。

なのに、感じる。俺を見る、あの視線だけはそれだけが俺に教えてくれる。この空間にいるのは俺だけではない、別の誰かが俺をつけている、ということを。

…誰なんだ…どこから見てるんだ…?

周りを見渡しても誰もいない。気配を感じることもない。…だが、

『田』の存在だけは、ひしと伝わって来る。

少しづつ追い詰められている様な気分になる。汗が流れてくる。
落ち着け……こいつは今まで俺のことをただ『見ていた』だけ
じゃないか。こいつは俺を襲う気なんて無い。だから焦る必要なん
て無い。

… そうやって心を落ち着かせようとしても、不安は一向に拭われ
ない、焦りは増すばかり。

ダメだ。悪い方にはばかり考えてしまう。

… そんな中、不意に脳裏に先程の鏡士郎の言葉が過ぎる。

『 殺したはずの貴方が生きていることに気が付き、自身の
不始末の隠滅を図ろうとしている 』『 もう私達も貴方の身
の安全を保証することは出来ません 』

その言葉を意識した瞬間、今まで感じなかつた、もう一つの強く、
大きく、禍々しい意志を感じた。

… そう、これは『殺意』。

『怒り』とも『憎しみ』とも違う、最も根源的な、人間の本能の
一つ。だが、抑圧された奥底に秘められた感情。
明確で鋭い、ただただ俺を殺さんとする意志の塊が、俺に向けら
れている。

俺は震えた。ただ恐怖に揺り動かされて。ただ本能のまま感じ取
つて。

そして予感した。これから俺の身に降り注ぐであろうことを。そ
の果てにある結果を。

『死』。

一時間ほど前にシルヴィア刺された時……あの時は、何が起こったかを理解する前に刺されたため、『恐怖』より先に『痛み』の感触が全身を襲つた。だから、死を恐れることなくしていられた。

だが、今は違う。明確に向けられる『殺意』が俺の中の感情を刺激し、『恐怖』が生まれている。『痛み』を伴つ前から。

人と言うのは、事前に自分の身に降り注ぐ事実を伝えられていれば、ある程度それに対する意識が向いて、自然と気構えが出来ると思つていた。

……だが流石に、『自分が死ぬ』と言う事実に対する気構えだけは、しようと思つても出来ない。……当然だ。気構えだけで何とか出来るものではないからな、『死』だけは。

そしてそれはもちろん、ついこの間までただの人間だった俺にとっても例外ではない。

つき動かされるかのように、全力でこの場から立ち去ろうとした、その瞬間

「オンヤア～？ 餓鬼はもう寝る時間だぜえ～。なあに夜中に一人でほつつき歩いてんだあ～？」

突如、背後に人の気配を感じる。

一瞬、声を出してしまったが、寸前の所で留まった。
……というのも、二つ、気付いたことがあったのだ。

まず一つ目、声の主が現れた行き止まりだったはずの俺の背後、正確には、先程俺が出てきたシルヴィアの仮住まいがあるだけで、人が通れるような道は無かつたはずだ。

つまり、この男はたまたまここを通つたと言つわけではなく、この廃ビル群の中のどれかに隠れ、ここを通るはずの、あるいは通つた人間を待伏せていたと言うことになる。

そして……もう一つ、奴から感じる……これは、『殺氣』。

さつきから感じているものと規模は違うこそすれ、根源的なもの

は何も変わらない。

殺意

『意を殺すだけ、憎しみも怒りも無い、純粹な

後ろを振り向けば殺される。立ち止まれば殺される。逃げなれば殺される

「オイオイ逃げんなってえ！ 楽しめねえじゃんかよおー！！

に遠ざかつてゐる。

逃げなさいが、俺は確実に二つ殺せるからね。

果てしなく続く道のように思えた。

「… その君、こんな時間に何をしてるんだい？」

荒い呼吸と足音しか聞こえなかつた耳に、前方からの新たな声が聞こえる。先程とは打つて変わつた、冷徹さを感じさせない優しげのある声。

警察官だつた。

考えてみれば、今は深夜の3時、家出少女や不良少年など、夜の街を出歩く子供達を補導するために警官が徘徊していくも、なんら

おかしくは無かつた

助けを求めるようと、声を張り上げた。

だが、その声は届かなかつた。

ビシュウ…と、辺り一帯に紅色が広がる。

見覚えのある紅 そう、血の紅だ。

ハツとなつて腹部に手を当てる。だが、傷は見当たらない。この

血は俺のものでは無かつた。

では誰の血だ?あの男に刺されるとすれば、一番近づく俺であるはずだ。

襲撃者が一人なら、の話だが。

気付いた時には、もう遅かった。

襲撃されたのは、俺の目の前の警官。その男には既に

首が、無かつた。

「…ジョン、少し落ち着きなよ。その子を殺すチャンスは、これから幾らでもあるんだから」

声が、出なかつた。

血を吹出しながら路地に転がる生首を見て。首を失い、崩れ落ちるよう膝を付き倒れる首から下の体を見て。

そして、隙間から差し込む月光を背後に現れた、返り血に塗れた青年を見て…

「あ…あ…」

叫べなかつた。

恐怖に押し潰されそうになつて、ただ立ちぬくしか無かつた。

「…うつせえな、テッドオードラケリアの嬢ちゃんがいねえ今しかチャンスはねえだろーがよー…」

眼前の青年が声を発して一呼吸置いた後、俺の背後から再びあの声が上がつた。悪寒が再び込み上げて来る。

「…何時でも君は軽率だね、ジョン。…それに、どうしてそこまで男殺しを楽しめるんだい?ボクには理解不能だよ…」

「ケツ、強姦魔もどきが… オレのことを悪く言える質かよお…」
二人が何を言っているのか、全く耳に入っこない。…いや、入
れたいとも思わない。

『死』、『死』、『死』……。ここから、霧囲氣から、
何もかもから感じ取れるのは、『死』のただ一文字だけ……。
俺の中を満たしていたものは、それに怯え、生じた『恐怖』……。
ここからが発する『死』の臭いに怯え、ただただ震えるのみだった。

死にたくない

「つーわけだあ、餓鬼んちょ。… テメHにはここで死んでもら
うぜえ…」

何も知らないまま…こんなところで

「男を殺すのはボクの美学に反するけど、まあ、あの御方の命令だ
から仕方ないね…」

まだ…終わる…わけには

「泣き叫ぶくらいはしてくれよお、餓鬼んちょお…」

「ツ…」

辺りに満ちるの静寂。冷たい夜の冷氣が、俺の肌を撫でる。
閉じられた俺の瞳は何も映さず、光芒一つ通さなかつた。

ここは、天国か？それとも地獄か？

いや、どちらでも無い。空氣の冷たさを感じるし、何よりも周

りの殺意が痛いほどに感じられる。

「だが、痛みも何も無い。」

刺されたはずの痛みも無ければ、血の流れる感覚も無い。

「生きてるのか……俺は……？」

「……『殺人道化』^{キラー・クラウン}、ジョン＝ゲイシーに、高名シリアルキラー、テッド＝バンディ^{おまえらのリーダー}：貴様等が最初に仕掛けて来るとは……。どうやら、『切り裂きジャック』には余裕がないみたいだな」

うつすらと目を開けた途端に、俺の視界全体は光に包まれた。

「いや、光ではない。美しく棚引く純白の髪、それに月光が反射して、これまでに見たことがないほどに幻想的な風景を生み出している。」

それとは対照的に、その身を包む漆黒のゴシックドレスは闇に溶け込み、その隙間から僅かに除く純白の肌を夜の闇と共に一層際立たせている。

少女が握る一本の細剣 マンゴーシュは、夜に溶け込む黒、夜に際立つ白、一つの対照的な色を以つて輝かしく存在している。

その剣の切っ先にて交わるのは、また別の…銀に輝く二つの切っ先。

ソレが握られる手の先にいるのは…一人の男性。

「……ッ！」

「なつ……なんでてめえがここにいやがるんだよお……？」

方や返り血を体中に浴びた、もの優しげそうな風貌ながらも、十分過ぎる狂氣を内に秘めた青年、テッド＝バンディ。

方や歪んだ顔付きで、ピエロの様な滑稽な衣装に身を包む男、ジョン＝ゲイシー。

見なりも歳も、何もかもが違う一人であつたが、ただ一つだけ共通するものがあつた。

それは、『驚愕』の表情。

突然の闖入者に、俺の殺害を邪魔されたといふこともあるのだが

うが、それだけじゃない。

こいつらが驚いているのは、もつと別のこと

「…遅れてしまない、遼。…君を、助けに来た」

そう、吸血鬼のお嬢様、シルヴィア＝ヴラート＝ド・ラケリアの登場、それに驚愕しているのだ。

6章・月光と決意

「シル……ヴィア……。お前……どうして……ここに……？」

満月の光を背に浴びたシルヴィアは、一本のマンゴーシュを左右の手に握り、腕を交差させるように俺の前に立っている。

チリ…と微かな音を立てながら、その刃は火花を散らしている。

俺を狙う二つの銀の刃と、俺を庇う黒と白の剣。

シルヴィアは涼しい顔でその刃を受け止めているが、その剣の操り手は両者とも男。…しかも吸血鬼の、だ。

「理由なんて聞くものじゃないぞ？…よく言うではないか、『人を助けるのに、理由なんて必要ない』…とな」

尚も平静を保つたまま、背後で震えて立っている俺に話し掛けてくる。

…どちらかと言えば、襲撃者の一人組の方が余裕の無いように見える。

片方の男は、ジョン＝ゲイシー。

本名はジョン＝ウェイン＝ゲイシー。40年代のアメリカ合衆国生まれの連續殺人鬼。四十年の短い生涯の中で、三十三人の少年を殺害した有名な猟奇殺人犯だ。

子供を楽しませるためにピエロの恰好をしていたことから、『殺人道化^{ラーグラウン}』の異名を持つていたと言われる。

もう片方の男は、テッド＝バンディ。

本名、セオドア＝ロバート＝バンディ。ジョン＝ゲイシーと同年代、同じ国に生まれ、彼と同様に大量の殺人を行った殺人犯。

三百人以上の女性を惨殺し、更に自らの性欲を満たすための道具にしたとされる、アメリカ史上最悪の凶悪殺人鬼。『連續殺人鬼^{シリアルキラー}』の原初とされた男である。

どちらも十何年か前に処刑、あるいは病死したとされていたはづだが……こうしてこの場に現れたということは、身代わりを使つたか、吸血鬼の力で乗り越えたか、そのどちらかだろう。

『^{ジャック・ザ・リッパー}切り裂きジャック』がまだ健在で、しかもこの日本でまた殺人を犯している：という事実を聞かされた時ほど驚きはしないが、警察にとつてはいい迷惑だな、と思える。

……だが、問題はそんなことじゃない。

その凶悪犯罪者一名の顔をしかめさせる…それほどまでにシルヴィアが強いのか、ということだ。

幾らシルヴィアが『^{アルカード}王の一族』であるにしろ、人殺しに慣れた一人がたつた一人の吸血鬼相手に怯むとは到底思えない。

その間に、圧倒的な実力差でも無いかぎり、だろうがな。

「…分が、悪いみたいだね……。一旦退いて、ジョン」

「はあ！？ふつざけんなよお…」ここまで来て、諦めてたま

「彼女の二つ名 忘れたわけじゃ、無いよね？」

「…プラッティ…ローズ…」

「そ。彼女の二つ名は『吸血鬼として』のものだ。君みたいに『人間として』のものじゃない。…当然、この差も分かつてるよね？」
「…………ちつ…」

あくまで冷静に状況を分析したテッド＝バンディに対しジョン＝ゲイシーは、明らかに不満げな様子を現している。

二人でかかれば傷一つぐらいは付けられるはずだろうに、それでもテッドには攻める様子が見られない。

…かといって、絶望的になつてているわけでも無いのは、恐らくシリヴィアが深追いはしないということを理解しているからだらう。

俺という、足手まといを抱えているせいで…

「…………しゃーねえ、ここは退いといてやらあ。命拾いしたなあ、餓

鬼んちよ」

触れ合つたままであつた刃を押し返し、大きく後ろに飛んだ後、シルヴィア…そして俺に向かつて、皮肉を込めた笑い声を発するピエロ男。

同時に、その反対側にいた美丈夫も、シルヴィアがバランスを崩した瞬間を見計らつて大きく後ろに飛び。

力の入れ所を失つたためか、シルヴィアも一度体勢を崩したが、すぐさま何もなかつたかのようにマンゴーシュを構え直す。

左右の刃を裏手に持ち、腕を下ろし氣味に構える独特の構え。形こそ整つては見えないが、一部の隙も見当たらない。

「…どうした？男が一人もいるというのに、たつた一人の女に怖じけついてしまつたのか？」

依然として余裕を持つた顔付きをしたまま、少し笑みを含んだ表情で挑発をかける。

「…ま、そういうことですよ。ボクらの様なただの『感染者』程度じゃ、『王の一族』の貴女の実力には遠く及びませんから」

それなのに、この優位を生かそうとしないでこの場で俺を仕留めようとせず、それなのに、この優位を生かそうとしないでこの場で俺を仕留めようとせず、みすみすチャンスを逃すような真似をするのは何故だ？

…それに、この時点で標的を仕留めそこなつたなら、それこそ次の襲撃への対策を練られてしまい、行動が起こしにくくなるはずだ。すぐに殺す必要がないのか…それとも、何時でも俺を殺せるのだと余裕でいるのか……。

どちらであつたとしても、今を生き残りたい俺にとっては好都合ではある。

「…そろそろ夜も明ける頃だ…。ボクらはこれで失礼します。またお会いしましょう、『血塗れの薔薇』^{バラディローズ}、シルヴィア嬢」

テッド・バンディは、丁寧に深いお辞儀をするや否や、後方に大

きく跳躍し、大通りの向かい側の路地の影に消えていった。

これで、残つたのはあと一人。少し気分が落ち着いて、緊張が解けようとした時

「 これで終わったと思つなよ……」

獣が唸る様に、もう一人の襲撃者・ジョン＝ゲイシーが憎しみを込めた声を出してくる。

シリヴィアが既に俺とジョンの間に立ち塞がつているため考え無しに襲い掛かつて来ることはないだろうが、滲み出る殺氣だけは意識の外に追いやることが出来ない。

滑稽な身なりをしていながらも、肌に化粧をしただけでは隠されないほどに歪みきつた表情からは、逸れ相応の歪んだ笑み 殺しへの『執着』が見て取れる。

「 そこの嬢ちゃんのおかげで今回は命拾いできたみてえだがなあ……オレ達はそう簡単には諦めたりはしねえ。リーダー直々の命令でもあるしなあ」

ジリジリと後ろに後ずさりながらも、威勢の良さだけはあるで衰えていないようだ。

暗闇に溶け込み、見えるか見えないかのギリギリの位置で立ち止まり、再び醜い笑みを浮かべる。

「 …テメエは逃げられりやしねえ。…ま、次会つた時は覚悟しとけやあ。腰抜かして何も出来ねえやつ殺すのはつまんねえから、少しはまともに戦えるようになつとけやあ」

最後にそれだけ言い残すと、ピエロは下卑た笑い声を上げながら跳躍、ビルの壁を蹴つて飛び屋上にたどり着くと、視界の外へと再び跳躍し飛び、暗闇へと姿を消した。

「 退いたか…」

周囲に人の気配が感じられなくなつてから、ようやくシルヴィアも警戒を緩め、構えを解き武器を下ろす。

両手のマンゴーシュをくるくると手の中で回し、その勢いを殺さぬまま、袖の中にある鞘の中へと刃を滑らせる。

その際、彼女の白い絹の様な長髪が風にたなびき、月光を反射して幻想的な光景を作り出す。その光の中一筋映し出される紅い眼光もまた…この少女が、俺とは違う世界の住民であるという事実を教えてくれる。

「 間一髪…だつたな。間に合つて良かつたよ」

俺が怪我してないかどうかを軽く確かめた後、心底ほつとした様な表情を浮かべる。

確かに服にはまだ渴いていない血がこびり付いてはいるが、これは俺の出血ではないから、当然俺は怪我などしていない。

…だが、怪我をするよりも血を流すよりも、ずっと心苦しい生傷を、一つだけ…付けられてしまった。

一つは、恐怖に足がすくんで、何も出来なかつたこと。

喧嘩ぐらになら、高校生の時に腐るほどやつた。だからこそ吸血鬼と戦うことになつても、俺なら戦える、俺なら勝てる…って思つていた。…けどそれは、俺がまだこの世界のことをナメきついてから、俺の傲慢さが生んだただの勘違いだったんだ。

…それなのに、ジヨン＝ゲイシー…あの殺人鬼に睨まれ、殺気をちらつかせられただけで、恐怖に頭が支配された。頭が真っ白になつた。

俺は…無力だつた…

悔しい。目の前の人間すら守れなかつたことも、たつた一人の少女に守られたことも、何も出来なかつたことも……。

悔しい。悔しい。強くなりたい。強くなりたい。

自分を守れるくらいに、誰かを死なせないくらいに、あいつらを倒せるくらいに

「もう止める…遼。これ以上やれば…君の手が…」

意識が現実に戻ってきた時、シルヴィアが俺の右手を胸に抱え込んで、何かを止めるように訴えかけていた。

気付けば、さつきまで何ともなかつた俺の右手が、滲み出た血によって真っ赤になっていた。

手に刺さつていた小さな石片、ヒビの入つた俺の右側の壁から察するに、俺は知らず知らずのうちに拳を壁にたたき付けていたみたいだつた。

小さい頃の癖が、まだ治つてないみたいだな

「…悪い。…もう…大丈夫だ…」

「あつ…」

抱え込まれていた手を振りほどき、シルヴィアに背を向け手を握りしめる。

感情が行動に現れてしまつのは、俺の昔からの悪い癖だ。

昔はこの癖のせいで、俺は感情が高ぶる度に、無意識に人を傷付けていた。中には、骨をへし折つたり、殺しかけた奴もいた。

間違いなくそのせいだろう…俺に近づく人間はほとんどいなかつた。

学校でも常に恐れられ、嫉まれ、嫌われ…だがイジメの対象にしようとする人間もいなかつた。

先生にも見放された。友達がないのは全てお前が悪いのだ、と突き放すように事実を言われた。

だから、いつも俺は孤独だつた。

そんな俺が友達を作るためにできたのは、テレビの番組の話でも、

好きな音楽や漫画の話でもない。『力』で押さえ付けて『屈服』させることだけだった。

そんなことで作れたのは『友達』なんかじゃない。『奴隸』、『部下』、『舎弟』……どれも『友達』 対等な立場の関係には程遠い、力だけで作り上げられた紛い物の関係に過ぎない。そんなことは分かつていた。

だけどその時の俺は、それを嬉しく思っていた。快感に思つていた。例え紛い物だつたとしても、それが俺にとつては『人間関係』であることには違ひなかつたのだから。

俺はひたすら力を求めた。強くなるため努力をした。 全ては、紛い物の『関わり』を作るために。

そんな俺から、『力』を取つたら、一体何が残る？

…いや、何も残りはしない。俺には結局、『力』しか無かつた。今の…戦えない俺は…文字通り『無力』だ…。

「君が今考えていることの全ては、私には分からぬし、検討もつかない。…だが、今の君が何かに悩んでいることぐらいは分かること…」

背中に何かがトン、と触れる。

小さくも大きく感じる、冷たくも暖かく感じる…シリルヴィアの頭。背を向けた俺に体重を預けるように…また、体重以外にも何かを預けるように…ゆっくり、ゆっくりと力を入れてくる。丸めこんだ手の柔らかい感触も、時折かかる息のくすぐったさも、何もかもが敏感に、そしてはつきりと感じられる。

「…お前に…俺の何が分かるんだよ…」

「『全ては分からぬ』、と言つただろう?…私に分かるのは、君が何かに対して、非常に悔しい思いをしている…ということだけだよ。…まあ、君の表情を見れば…私でなくとも、大体の予想はつくだろうがな…」

「……」

「…戦えなかつたのが悔しいのか？」

「ツーーー？」

急に心のうちを見透かされた様な感覚に陥り、寒気が走る。

「コイツは何でも見透かしそうな気がしていたが、本当に今考えていることを言い当てられるとは思わなかつた。後ろを振り向くと、シルヴィアは一瞬キヨトンとした表情をしていたが、俺の驚いた顔を見たあと軽くにやけてくる。

「図星……だつたみたいだな？ ほとんど勘で言つてみたのだが…」

「勘…かよ…」

急に肩の力が抜けた。　　と同時に、何だか恥ずかしくなつてきた。

驚きすぎた反動もあるのだが、なによりシルヴィアに鎌をかけられ、からかわれたことが恥ずかしくて堪らない。

「ふむ……では、こつしょよ？」

ポリポリと恥ずかしげに頬を搔く俺を横目にシルヴィアは、俺のポケットから手帳とペンをサッと抜き取り、破り取ったメモ欄の上に何か書き留めていく。

「何してんだ？」

シルヴィアがペンを滑らせる先に描かれていたのは、地図　聞
き覚えのある建物の名前や配置から、渋谷の辺りのものだと思われる
と住所、そして、何かの暗号と思われる言葉　『宵（よい）
と一曉。交わり、闇照らす紅の牙有る。』という文字列。

「…これに書いてある場所に、明日の夜9時に向かうといい。そこに、君にとつて今最も会つべき人間がいる。私からも話を付けてお

く

「おっ、おい！ ちょっと待て！ いきなり何の話を？」

「当然、君に関係のある話だ。　　そこに書いてある合言葉を言え
ば、『沢代』と言つ者に会えるよう手配しておこう。　　健闘を祈る
メモを俺に渡し、別れも無しに帰ろうとするシルヴィアを引き止

めようとするが、質問に即座に答えられた挙げ句、いつも容易くあしらわれてしまう。

路地の奥 つまり自分の住居がある方へと歩むシルヴィアは、闇に紛れる寸前に立ち止まり、こちらを振り向かないままに、俺に向かつて最後の励ましを送つてくる。

「 そこの警官の死も、何もできなかつたことも、決して君のせいなどではない。…もし自分を責めていふと言つのなら、今すぐそんなことは止めろ。 自分を責めたつて、何も始まらないのだからな」

「 ……」

「 まだ、何も始まつてなどいない。…君は今、漸く我ら夜の眷属けんぞく吸血鬼の一人となつたのだ。君きみが無力であつたといふ事実は、この世界においてはただの『序奏曲』プロローグに過ぎない。 無力だと思うなら、強くなれ。無知だとと思うなら、求める。…君の奏でる『交響曲』コンサートは、これから君自身の手によつて、無限に描くことができるのだからな」

それだけ言い残すと、再びシルヴィアは歩きはじめ、路地の奥の暗闇へ姿を消した。

「 …フツ…………」

自然と笑みがこぼれてくる。さつきまであつた無力感は、既に消え去つていた。

なんだ。簡単なことだつたんじゃないか。

『力が無いなら、手に入れればいい。足りないなら、補えばいい』
。 … そんな初步的なことを見失うなんてな。

『死』の恐怖が俺の目の前に立ち塞がるなら、乗り越えればいい。

昔の俺が、『孤独』を乗り越えようと、一人で足掻き、もがいた時のように

気持ちに整理が付いた俺は、これ以上一人で立ち止まつていても

何も意味は無いと悟り、路地裏をあとにすることにする。

途中、首無し死体となつた男が目に入つたが、無理矢理に目を逸らし、前に進むことに気持ちを向ける。

あんたの死は無駄にしないぜ、名も知らない警察官さん。

そう心の中で念じ、その横を通り抜けて人気の無い道に足を踏み入れようとした。

その時。

「 動くな。余計な行動をとれば撃つ」

「ツーーー？」 背中に突き付けられる冷たい感触。引き起こされる

撃鉄の音。

間違いなく、突き付けられているこれは…拳銃。

路地の脇に隠れ、恐らくは俺が背を向けた瞬間を狙つていたのだろつ。 明確な目的を持つて。

「 ……なんで……」

先程の機械的で冷酷な声とは打つて変わつて、今にも啜り泣きそ

うな悲しげな声が聞こえてくる。

この声には……聞き覚えがある。

だが、その勘だけは外れていてほしかつた。

「 ……なんで…アンタなのよ…遼…」

「 やっぱり、お前……なのか……？」

背中越しに聞こえる悲愴感のある声の持ち主の方向へ振り返り…

そして

現実を、思い知らされる

「……コリア……」

憎しみと悲しみ……二つが混じり合った感情が、背中越しにひと伝わる。

全ての感情は、俺の背中に銃を突き付ける少女・浅野あさの ユリアから放たれている。

ユリアは俺の幼なじみであり、唯一俺に話し掛けてくれた人間だ。

性格は快活で天真爛漫、他人のことをよく考え行動ができる、クラスの人気者だった。

ただ、多少お節介だったため、周りから距離を置かれていた俺に對して過度に接することも少なくなかつた。

それが原因で、俺を標的にした事件に巻き込まれ、その度に巻き添えを食っていた。

だが、それでもユリアは、俺の隣に居続けようとした。

何時でも、笑顔のまま

「……これは……遼がやつたの……？」

震える声を搾り出すように、ユリアの声は俺に一つの質問を投げ掛けた。

恐らくユリアが指しているのは、そこに転がされている警官の死体……のことだろう。

この場にいる人間は俺だけ。そして、この男の返り血を浴びている人間もまた然り。刃物も所持していることもあるから、疑われるのにはまず間違いないだろう。

だが、コイツは分かつていいはずだ。昔の俺を……そして、俺がこんなことをするような人間では無いということを……。

「……ねえ……答えてよ……遼……嘘だつて言つてよ……」

銃口が震えている。恐怖に震えているのか、あるいは目の前の情景が信じられないのか……。

……が、それも当然だろう。コリアは人一倍優しかったが故に生き物が死ぬところを直視できないほどであり、また人一倍他人思いであつたが故に、人を疑うということが出来ない人間立つただから。

だが、俺はその声に答えることは出来なかつた。

恐らく今までの俺 何も知らず、平穏というぬるま湯に浸かつていた頃の俺であれば、これをやつたのは自分でも無いと必死に弁明し、見苦しく喚いたかもしれない。あくまで、これは俺が『一般人』だった時の話だ。

だが、今は違う。全てを知つてしまつた今では、そんな弁明は全くの無意味だということぐらい理解できている。

……じつにビデオで吸血鬼^{ヴァンパイア}のことを説明してやればいい?並大抵の人間は、こんな現実味の無い話をされても、信じられるわけがない。むしろ、無意味な言い逃れか、頭が狂つているか、もしくは麻薬でも使つた後遺症かとしか思はないだろう。

それはもちろん、まだこの件に関わっていないユリアについても同様であるため、幼なじみであるからと言つて気軽に話せるわけでもない。

そしてもう一つ……なにより、俺がコイツを巻き込みたくないと思つてゐるからだ。

こいつが今握っているのは恐らく、銃口の感触、突き付け方から予測すると、携帯式の小型リボルバー拳銃だろう。私服警官が携帯するのに便利なように、銃身を短くして作られたものだ。

拳銃を所有・保持できる存在と言えば、暴力団やヤクザの類か、

警察官かのどちらかだ。

前者の可能性はほとんど無いだろ。リボルバー拳銃は、その構成故詰められる弾の数が少なく、正直なところ、あまり実践的とは言えない。組同士の抗争が勃発することも少なくはないあちらの世界では不利になることも少くないため、出回っているものの多くはオートマチック拳銃のはずだ。それに何より、こいつは暴力が嫌いだ。自分から進んで暴力を奮う道には進もうとはしないだろ。

となると、残るは後者……つまりは警官、ということになるが、実はこれには根拠がある。

こいつは正義感も強いことがあって、『警察官になる』という漠然とした目標を持っていたこともあるのだ。

俺は前々から「お前は体が弱いんだから、無理してまで他人を守る必要はない」と言っていたのだが、それでもユリアが諦めきれなさそうな顔をしていたのは記憶に新しい。

……だがあくまで、こいつの体が弱かったのは小学校までの話であり、俺が中学卒業後転校する頃には、元気に校庭を走り回ったりする様子が見られたのも事実ではある。

俺と会わない間に体を鍛え、警察官として活動できるまでに体力を付けたとしたなら、考えられないこともないのだが、……それにしても、体が弱くても関係ない、鑑識や事務の仕事に回らなかつたのは不思議である。

だとしても、この事件はこいつには荷が重すぎる。

いくらこいつが強くなつていたって、相手は吸血鬼、しかも『王アーラカード』の一族の追跡から百年以上も逃げ続けている、文字通り化け物みたいなやつだ。

体力を付け、護身術や逮捕術をどれだけ学んだのかは知らないが、今このこいつに敵うような相手ではないことは歴然としている。

そんな危険なところに一般人を放り投げるような真似は、いくら俺にでも出来ない。……それが幼なじみなら、尚更だ。

「……答えられないの、遼……？……」一体どうして……」

声が徐々に小さくなっていく。

……相変わらず、普段は気丈で明るく振る舞っているくせに、俺がだんまりを決め込むと必ず普段の勢いが無くなる悪い癖、まだ治つてないみたいだな。

人を疑うことを知らない純粋な性格も含めて、それがあるからお前は警察には向いてないって昔から言つてゐるに……仕方ない奴だな、本当に。

「……今はまだ話せない。……退いてくれ、ユリア」

「……どうして？どうして話してくれないのー？あたしは……遼が

……」

突き付けられている銃口に入る力が、ほんの少しだけ緩む。

この状況を打破するには、この瞬間しかないッ！……と考え、行動を起こそうとした。

のだが……。

「ぐつ！？」

背後の銃を奪おうとしたが、俺の手は虚しく空を掴んだ。

代わりに俺の腕が捕まれ、その関節部分に、無理矢理捩曲げられるような痛みが走る。

右腕が身体の反対側に回されて、力が全く入らず、まるで身動きが取れなくなる。

……これは……昔警官にお見舞いされたことがある。確か……逮捕術の固め技の一つ。詳しい名前は知らないが、相手の腕を逆方向に捩曲げ押さえ付けることで相手を拘束する術だ。

技は初歩の初歩で習うようなものだが……ユリアに俺を完全に押さえ付けられるほどの力があるとは。

「……あたしだって、あれから強くなったんだよ……遼……」

耳元で吐息に乗せて囁き声が聞こえる。

流石に体格の差が影響しているのか、押さえのに必死で声を搾り出すこともままならないようだ。

「……遼……あたしに隠し事はしないで……。あたしは、ただ遼のことを……」

腕にかかる力の量が増す。あまりの激痛に口を聞くことすらままならない。

「隠し事など、したくはない。

正直で純粋で、まるでダメな人間だった俺を、孤独から唯一救おうしてくれたユリアに、嘘などつきたくない。全てを洗いざらいぶちまけてしまいたい。

事実を述べてしまえば、間違いなくこいつはこの事件に嫌でも関わるだろう。無差別に様々な人間を殺す『切り裂きジヤック』を、正義感の強いユリアは許さない、それは昔から変わらないからな。

「だが、そんなことをしてしまえば、こいつも関係者と見なされ、最悪、命を狙われ、殺されるハメになるかもしれない。

自分のことに精一杯な今の俺に、こいつを守りきれるとは思わない。シルヴィアに匿つてもうひとついうこともできるだろうが……、ユリアのことだ、恐らくこいつは前線に出てきて、俺に付き纏うだろ。それでは守つてもう意味がない。

「……ユリア。お前は今まで通り、平穏な世界で、平和に生きるべきだ。

「お前みたいに性格のいい女の子はそうそういうからな。ルックス……は、今の顔をまだ確認していないから分からぬが、誰の目から見ても相当の美人となっているだろう。……忘れてたけど、俺の幼少の頃の初恋は、お前だった、それぐらいに昔のお前は可愛らしかったぞ。

「お前はきっと幸せに成れる。それは俺が保証する。

だから……そんな汚れ仕事は、お前がする必要は無いんだ。

これは……俺のような薄汚れた人間がするべきことなんだ。関わつたら、お前まで黒ずんでしまう。

だから

「……悪い、コリア

ガッ

「うつ……！？」

固め技を掛けられておらず、まだ動く左腕で、思い切りコリアの腹に肘打ちを当てる。

前までの俺なら、利き手と逆の左手で肘打ちを当てても、人一人気絶させるほどの威力はなかつたはずなのだが、流石は吸血鬼の力といった所か、軽い力で安々と卒倒させるまでの威力が出るなんてな。

うめき声を一瞬上げたかと思つと即座に氣を失い、俺の体にもたれ掛かつて来るよう力無く崩れ落ちた。

左腕、そして自由になつた右腕で、倒れそうになつたコリアの体を受け止める。

そこで、ずっと背後にいたコリアの顔を、よつやく見ることができたのだが……。

淡い栗色の柔らかそうなセミロングヘア、後ろで小さく束ねられたボニー・テール。背丈は女性にしては割と高めで、俺の肩先より少し高いぐらい。ハイヒールを履いている様子は無いので、3年とちよつとで相当背が伸びたということになる。

色は健康的な肌色で、小顔ですつきりした顔付きをしており、薔薇のような美しさを持ったシルヴィアとは違つ、例えるなら、健気で可愛らしく咲く「スモス」……といった所か。

体つきは、病弱だつた頃の名残か、所々節が少し細くはあるが、（昔から憧れていたらしい）女性らしい体つきに成つていた。

……地味にシルヴィアより……でかいな……。

「……つて、俺は何を考えてるんだよ……相手はコリア、幼なじみだぞ……」

……と、少しやましいことを考えてしまった自分を諫め、そつとコリアをお姫様抱っこする。

色々と触りすぎているのは少し後ろめたいが、この場合は仕がない。諦めるしかないだろ？。

「スウー……スウー……」

安らかな寝息をたてて眠るコリアを見ると、そんなやましい感情も自然と消え去っていく。

……やつぱり、こいつはこんな事件に関わる必要なんてないんだ。昔から俺に金魚のフンの如く付き纏い、その都度絡んできた不良から守つたり、動けなくなつたコリアを背負つて帰つたり……あの頃はよくコリアが『今お尻触つたでしょ！』とか言つて無実の俺の背中をポカポカ叩いてきたような記憶がある。

……じうやつておぶつてみると、こいつの重さは、何一つ変わらないことが身に染みて感じ取れる。

軽いはずなのに、とても…とても重い

「……今は、ゆつくり寝てろよな」

コリアを起こさないことに、ゆつくりと歩きだし、人影一つない宵闇に沈む街を歩きはじめた。

「…………?」

「コリアが目を覚まして初めて見たものは、白く発光する蛍光灯の光。自分が寝ていた場所を触った感触も、舗装された道路などではなく、少し破れて綿が出ている古ぼけたソファの革の感触。

……そこは、最後に見た暗がりの中の路地ではなく、明かりの付いた交番、その事務室だった。

「目が覚めたか、浅野」

寝ぼけ眼で辺りを見回していると、窓際から、コリアの耳に聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「……河上警部？ いらしたのですか？」

「ああ。お前からの定時連絡が無かつたから、様子を見に来たのだ」

「……お手数をおかけして、申し訳ありません…」

「いい。上司として、部下のことを心配するのは当たり前だ」

「……はい」

現在警部補の階級に位置するコリアの上司、河上 治彦警部は、黒のオールバックヘアに左手で軽く手櫛を入れながら、窓際で缶コーヒーを啜っていた。

「……飲め。体を冷やすのは良くないぞ」

「えつ……うわっととッ……？」

ようやく目が覚めたコリアがソファに座り直すと、窓際から離れた警部が、コリアがいるのとは反対側のソファに腰掛け、煙草の吸い殻が散ったガラステーブルに缶をコト、と音をたてて置き、向かい合うコリアの顔を真剣な眼差しで見つめてきた。

その真剣さによって空気が研ぎ澄まれ、コリアの頭も体も引き締まる

「……浅野、お前が三時間ほど前、現場検証のために渋谷の裏通りへ向かったことは、もちろん覚えているな？」

「あ……はい。私も、そう記憶しています」

「お前は、その場で何事かに巻き込まれたのか？」

「……え？」

唐突な質問に、コリアは一瞬キョトンとする。

「実のところ、自分は現場までお前を探しに行つた訳ではなく、この署の前で倒れていたお前を見つけてな。目が覚めるまで見ていただけだから、実際にお前が何に巻き込まれたのかまでは分からんのだ」

「……は、はあ……」

警部がこの様な突拍子もない質問をユリアに投げかけてきたのは、今回が初めてではない。

そして警部のこういった疑問や質問は、大抵事件の核心に触れたものであり、その解決とともに事件が進展するということも少なくなかった。これは経験故のものなのか…それとも天性の才能なのか…。

それ故に、ユリアは彼の疑問に答えることを最優先に援助して来たのだが。

「……えつ……と……」

今回ばかりは、それを話すわけにはいかない理由があった。「どうした? 口ごもる様な質問ではないだろ?」

「……その……えつと……」…言えない。

本当は話すべき事がたくさんあるということも。

…この件にもしかしたら、幼なじみの遼が関わっているかも知れないということも……。

全て話せば、遼が犯人だと認めてしまうということになる。

それだけはダメだ。そうなれば、ユリア自身も遼を追い、捕らえるべき立場になってしまつ。

まだ、遼を信じていい。だから、それだけはできない。

「……あたしは……何も……見ていません……」

俯いたまま、どぎれどぎれの声を搾り出すように答える。焦げ茶のスラックスをひしと握り締めて、ギュッと目をつぶる。

確かに、遼のことを話すつもりは毛頭ない。幼なじみで…

かつての初恋の少年の面影を残す彼を、突き放すような真似はユリアにはできない。

だが同時に、自らの憧れの人であり、大切な上司である人を裏切るようなことも、ユリアはしたくは無かつた。

『一者^{オルタナティヴ} 択一^{シカイ}』。どちらかを切り捨てなければいけない状況は、ユリアには酷すぎた。

「… そうか。話したくないことなら、いい」 意外な返答に、目をパツチリと開け思わず警部の方を見てしまう。

いつもなら、真相解明のために頑なな性質を顕わにするはずなのに、今回はあまりにもあっさりと引き下がったために、ユリアは少し驚いた。

警部がしつこく追求しようつとしないなんて…… 何かあったのだろうか？

ユリアの頭の中は、その疑問でいっぱいになってしまっていた。
そんな疑問を抱える中、警部はユリアに、更に思考させるような言葉を吐いた。

「…… 浅野、お前はこの件の捜査から下りろ」

「え？」

一瞬、その言葉の意味の理解ができなかつた。

「下りろ」…とは、もちろん事件捜査の担当 この場合、一切り裂き魔事件^{シリアルキラー}の担当を指すのは一目瞭然だ から外れる…ということを指す。それくらいは、正直頭の出来があまりよくないユリアにでも理解はできた。

理解できなかつたのは、警部の発した言葉 その意図だつた。
普通、一端^{じっぽし}の殺人事件程度のことでの担当の人間が捜査から下りるなどということは起こり得ない。有るにしろ、数百人の犠牲者を出している連續殺人犯や、国家を標的に、無差別に様々な人間を殺し得る可能性を持つテロリスト、そういう人物を追う時……しかも、そういう例の中でも、滅多に「捜査から下りる」なんて選択をするほどの容疑者は現れない。つまりは、かなり稀有なケー

スと言える。

しかし『切り裂き魔事件』は、ほんの数週間前に一人目の犠牲者が出たばかりで、まだ犠牲者の数も一桁には達していない。確かに、『連續殺人』のカテゴリには当てはまるかもしけないが、『捜査から下りる』ほどの事件とは思えない。

それらの疑問をまるで読み取ったかのように、警部は眉一つ動かさず口を開く。

「……この件の調査は、お前のような新米にはあまりにも重すぎる。
……悪いことは言わない。手を引け、浅野」

数々の事件を解決へと導き、犯人逮捕へと貢献したベテラン警部、その豊富な経験故に言えることなのかもしれない。

もしかしたら警部は、この件の真相に既に勘付いており、その危険性を今ユリアに伝えようとしているのだろうか？

だとしたら、これは警部からの警告、もしくは警部なりにユリアに気を使っているのかどちらかだろ？ そう思うべき……だった。
……だが、ユリアはそうは思わなかつた。

遼も警部も、あたしに何か隠し事してゐる

今までも、そしてこれからも信じ続けているつもりなのに、二人は自分に何も話さないつもりだ。

自分はただ、二人の手助けができればそれでいい……ただそう思つてゐるだけなのに……。

二人は何も話してくれない。

自分は蚊帳かやの外、何も知らないまま、平穀な毎日を享受するだけの存在。

それだけは嫌だ。

遼は、『良い子』としてしか周りに見られていなかつた自分を、

初めて『浅野 ユリア』として認め、一人の『ただの』人間として唯一接してくれた。

警部は、東京を初めて訪れ当ても無かつた自分に、自分がここにいてもいいという『理由』を『えてくれた。

二人が自分にくれたものは、今の『浅野 ユリア』が存在する理由であり、根拠でもある。

一人がこの件に関わるなど言つてはいる以上、自分は本当は関わるべきではないのかも知れない。

だが、ただの傍観者でいるのだけは、ユリアには到底許せることではなかつた。

遼が巻き込まれたこの事件の真相を知るため、警部の思いを知るため、……そして何より、『自分自身』がため……。

「あたしは、絶対にこの件からは下りませんッ！－！」

「……」

無人の警察署の中は、完全に静まり返つていた。

部下の浅野 ユリアがこの警察署から出ていつて約一時間後……

河上 治彦は、今だ無人であるその交番の事務室に佇んでいた。

現時刻は6時30分。そろそろ日の光も昇り始め、起床の早い人間ならばそろそろ目を覚ます頃時間帯である。もちろん、この無人の交番にも勤務交代時間が訪れ、この時間帯担当の巡査と普段通りに番を交代するはずだ。

普段通り、ならばの話であるが

「……」

河上の田の前にあるのは、事務室から更に奥に続く扉 倉庫として使われている部屋、その鋼色の扉だ。

それを開けたその先には、二人の警官がいた。恐らく、今が勤務時間の警官だろう。

だが、少し様子がおかしい。

かたや倉庫の壁にもたれ掛けたまま座り込み、かたや端に置いてある机に突つ伏した形でいる。

それだけならばただ酔つて寝ているだけなのかなと思うが、決してそれだけではなかつた。積まれたダンボールの山には、まるでペンキを塗りたくつたかの様に、鮮明な赤色 血が飛び散つていた。警官の肌の色は血色が失われ白く成つており、まるで血が全て抜かれていたかの様になつていた。

そして極めつけは 警官の左胸に空いた、大きな穴。

周りの鮮血はそこを中心にして飛び散つてゐるようで、血の渴き具合から察するに、まだ死後三時間ほどしか経つていない。

普通なら、この殺され方の酷さだけに着目しているのかも知れないが、河上は別の視点からこれを観察していた。

内臓をえぐり取り殺害する残虐非道な殺害方法。

犯行は深夜に行われていること。

この二つの事実から結び付くも……それは、ただ一つだけ存在していた。

「……………『切り裂き魔』……………」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0374x/>

斬殺者(ザッパー)

2011年11月20日03時16分発行